

市場価格と市場価値(五)

—— 価値法則論を中心として ——

山 本 二 三 丸

第一節 価値法則の「定式化」について

第二節 「社会的必要労働時間」について

(以上、第七卷第二号所載)

第三節 第三卷第十章におけるいわゆる「不明瞭な箇處」について

(以上、第八卷第一号所載)

第四節 「市場価値論」の位置づけについて (価値論における第一卷と第三卷との関連)

一、価値論における第一卷と第三卷との関連についての解釈(1)

二、価値論における第一卷と第三卷との関連についての解釈(2)

(以上、本号所載)

三、第一卷第一章における価値規定の問題

四、第三卷第十章における市場価値規定の問題

五、要約

(以上、次号所載予定)

市場価格と市場価値(五)

第四節 「市場価値論」の位置づけについて

(価値論における第一巻と第三巻との関連)

一 価値論における第一巻と第三巻との関連についての解釈(1)

さきに前稿において示されたように、マルクス価値論の正しい把握にとって決定的な意義をもっている問題は、『資本論』第一巻第一章における価値規定の内容と第三巻第十章における市場価値規定の内容とのあいだの内面的な関連をいかにとらえるか、ということである。

(註) 「市場価格と市場価値(四)」、本誌第八巻第一号、一三三—一三四ページ参照。

価値論における第一巻と第三巻との関連の問題といえ、ふつう、第一巻価値論と第三巻生産価格論とのあいだの「矛盾」の問題が想起されるのであって、このいわゆる「矛盾」の問題をめぐるからマルクス経済学説の「崩壊」または「終焉」を主張する者、マルクス価値論の「修正」を説く者、マルクス価値論を「擁護」する者、等々がいろいろだれて華々しい論争を展開してきたことはあまりにも有名である。だが、あまりにも「有名」な問題であればこそ、かえって、いわゆる「矛盾」論の内容や意義について突っこんだ究明が果されることなく、きわめて皮相的に、場合によってはおどろきの、または先入主をもって主観的にのみ、「解決」されてきたともいうことができるようである。この「問題」を正しく解決するには、「矛盾」そのものに拘泥してこれをいくらつき廻していても、とうてい不可能である。そのためには、第一巻の価値規定と第三巻の市場価値規定とのそれぞれについて十分な理解

をもち、さらに両者の内面的関連を正しく把握することが先決問題である。そして、その上で、市場価格と市場価値および生産価格の関係を充分究明することが必要である。このことは、また同時に、第一巻と第三巻との関連を、したがって、『資本論』全体の理論的構成をいかに正しく把握するか、という根本問題にかかわるものである。それゆえ、このようにして右の根本問題との関連においてさきの先決問題が解決されうるならば、いわゆる「矛盾」の問題のごときは、それ自身立ちどころに解消してしまうはずのものなのである。

「矛盾」の問題をそのまま採り上げて論じた見解には種々雑多のものがあつた、またそれらにたいする批判、反批判も数多く見られ、これらの議論の内容や科学的価値を検討することはそれとして相当の意味をもっているが、さしあたり、拙論の構成上、より基本的な、第一巻価値規定と第三巻市場価値規定とのあいだの内面的関連の問題をとりあげて、これの究明に力を注ぎ、その解明を通じていわゆる「矛盾」の問題の「自動的解消」を期することにしたいと思ふ。

(註) この問題にかんして、念のためとくに強調しておかなければならないのは、価値と生産価格との「矛盾」の問題を意識して最初に、しかも、この上もなく明確に、全経済学者の前に提起し、その解決を要請したのは、ほかならぬ『資本論』第二巻の編集者、F・エンゲルスその人であり、また、提出された諸学者の「解答」の誤謬を指摘し、その唯一の正しい解決の途を指示したのも、同じく『資本論』第三巻の編集者、F・エンゲルスその人であった、ということである。ところが、一八九四年エンゲルスが『資本論』第三巻への序文を書き記してから二年のうちにベーム・バヴェルクによつて物された論文、「マルクス学説体系の終焉」なるものが、エンゲルスによつて序文で指摘されている諸学者の「解答」にくらべてすら、その内容はすこぶる粗雑かつ貧弱であり、たんに『資本論』にたいする彼自身の無理解、曲解、混乱をさらけ出しているだけのものであるにもかかわらず、以後マルクス価値論批判者のための唯一の「経典」と成り上つたことは、まことに興味ある現象といわなければならない。内容が空っぽであればあるほど、そしてまた、大言壮語的な中傷が並んでいるだけであればあるほど、後代

マルクス批判家の同じく粗雑空疎な頭脳にとつてこの上もなく親しみやすく、喜ばしいものに思われるのは、けだし理の当然といふべきであらうが、ベームの「終焉」論発表後半世紀以上も経つて、マルクス学説は不断に発展をとげ社会主義世界また日ましに成長しつつある今日、相も交らずベームの論文の糟粕をなめてマルクス学説の「終焉」や「崩壊」をわめき散らす「理論家」連中がその跡を絶たないことは、何と評すべきであらうか。(たとえば、社会思想研究会編「経済学教科書の問題点」に収められた若干の論文、とくに気賀健三氏の論文「商品生産と価値法則」のごとき。)

価値論における第一巻と第三巻との関連をいかに把握すべきかという問題について、われわれは、さしあたり考究の材料として、この問題を意識的に、突っこんで論じていると見られる向坂逸郎氏の所論^(註)をとり上げ、その検討を通じて論点を明らかにしてゆくことにしよう。

(註) ここにとり上げられるのは、氏の著書『経済学方法論(第三分冊)』(とくにその「第三章 歴史的・論理的、その二——価値と生産価格——)と、論文「市場価値論と相対的剰余価値論」(『マルクス経済学の研究』大内兵衛先生還暦記念論文集(上)、所収)である。

向坂氏の論説を通読してまずわれわれが教えられるのは、氏の論説が、「価値の社会的平均的性質」なるものを唯一の枢軸として、その論理を組立てられている、ということである。第一巻と第三巻との異同および関連の把握も、したがってまた価値論全体にたいする理解の仕方、すべてこの「価値の社会的平均的性質」なるものをもって簡単に割り切られているようである。しかし、「価値の社会的平均的性質」という言葉そのものは、まことに簡単明瞭であるかに見えるが、その内容をいかに理解すべきか、したがってまたいかに理解すべからざるかの問題は、しかく簡単に解決されるものではない。向坂氏の論説における致命的な難点の一つは、実に、右の言葉についての混乱と混同とにあると考えられるのである。

まずはじめに、第一巻価値論と第三巻市場価値論との関連にかんする氏の論説の要点を、つきにかかげておこう。

① 「本来価値が社会的性質であり、社会的に平均されたものであることについては、すでに第一篇第一章でのべられている。このような性質である価値について、個別的価値と社会的価値を区別して論ずることの意味はどこにあるか、ということが重要である。あとで述べるように、ここに言う社会的価値は、第三巻第二篇第十章で詳細にのべられる市場価値なのである。：マルクスによれば、『資本論』の理論的体系は価値にはじまらなければならぬ。しかし、価値についてのべるとき、マルクスの頭の中では、市場価値論は、すでに存在していなければならないものである。市場価値を考えるとなくして、第一巻第一章の価値は考え得ない。論理的にそうなのである」(前出論文、五五ページ、傍点—山本)。

② 「マルクスにおける『価値』の実体が抽象的な人間労働であることについては、ここで言及するまでもない。さらに、それが社会的性質であることについても、またその平均的性質についても、必要である限り、第一巻の価値論で明らかにされている。要するに、商品価値を規定する人間労働の一般的性質については、第一巻の価値論で必要なる限りのべられている。私は、ここで必要なる限りと言った。例えば価値規定労働の平均的性質についてこのうのべている。

『だが、価値の実体をなす労働は、同一の人間労働である。……(中略—山本)……社会的に必要な労働時間とは、現に存する社会的に正常なる生産諸条件と労働の熟練と強度の社会的平均度とをもって、何等かの使用価値を造出するために必要とする労働時間である』(『資本論』第一巻、アドラツキー版四三頁)。

このように、価値を規定する『社会的に必要な労働時間』とは、労働を支出する個別的な労働力が『社会的平均的労働力の性質を有し、またかかる社会的平均的労働力として作用』する場合に成立するものである。したがって、『一商品の生産においても、ただ平均的に必要なる、又は社会的に必要な労働時間をのみ用いるという限りにおいて』個別的労働力が、他の一切の労働力と同一なる人間労働力となるのである。したがって、社会的に必要な労働時間とは、『現に存する社会的に正常なる生産条件と労働の熟練と強度の社会的平均とをもって、何等かの使用価値を造出するために必要とされる労働時間である』。後でのべるように、社会的に正常なる諸条件とは、資本の競争によつて成立する平均化作用の生み出す生産諸条件であつて、資本の不断の競争が、生産条件の高度化を促進しつつ、社会的に正常なる生産諸条件をつくり出すのである。したがって、労働の熟練と強度の社会的平均度といつている場合における平均作用と、社会的に正常なる生産諸条件をつくる場合における平均作用とは、

平均作用に関する限り、別のことではなく、社会的に必要であることは、社会に平均的であることの謂に外ならない。^(註二)

このようにマルクスは、第一巻で価値の社会的性質を論ずる場合にも、社会の全生産物が具体的には、個別的労働力によって生産されるものであつても、したがつて、社会の全労働力は、厳密に相等しい労働力から、成つていないことを予想している。このように個別的に同一でない労働力が、社会的平均的労働力として、価値の実体たる労働を支出するのである。それは、平均的生産条件をもち、強度と熟練度において、平均的である限りにおいて、かかる平均に約元されたものとして、価値の実体である人間労働を支出するのである。

ただマルクスは、如何にして、このような平均的性質が成立する、かという問題を、ここではある程度において無視しているのである。即ち、第一巻の価値論は、商品生産における競争ということから一定の程度において、抽象されているのである。^(註三) 同種の商品を生産する場合にも、現実には個々の労働は異つた条件の下に行われている。近代の合理的な経営は、生産諸条件、熟練度、強度を平均化する傾向をもつている。^(註四) ……

……したがつて、生産諸条件を向上させ、労働の熟練度や強度を均一化して行く傾向も、資本主義的生産様式においては、競争の強制法則を通じてなされる。社会的平均的労働の形成は、現実にはこのようにして行われるのである。個々独立した資本の支配下に個別的に行われる労働が、平均的な性質を受取る実際の仕方は、競争の法則の強制によるのであつて、ただ、われわれの紙の上で、平均として計算するだけではないのである。……

マルクスは、第一巻第一章の価値を説明する場合に、その実体が社会的平均的に支出された労働であることをのべているが、この社会的平均的性質が、いかにして形成されるかについては、少くとも暗示しているだけで、詳細なる説明をしてはいない。^(註五) それは、この場合、最も純粋に価値規定を説明しているからである。ここでは需要と供給が一致しているという前提から出発され^(註六)したがつて、競争の強制が止揚されている所に出発しているからである。「(前出論文、六〇一六三ページ、傍点―山本)。

(註一) 向坂氏の論文で終始「価値の社会的性質」なるものが強調され、同じ言葉が、ここに引用された第二節の表題としてさえ採られているにもかかわらず、ここで述べられているのは、価値ではなくして、労働の平均的性質であることに、注意されたい。価値の平均的性質と労働の平均的性質とは、根本的に異なつた二つの事柄である。ところが、この価値の平均的性質と労働の平均的性質との混同は、のちにみられるごとく、実に、向坂氏の論説の枢軸を成しているのである。

(註二) 「社会的平均的性質」と「平均化(作用)」とは、全く異なった二つの言葉である。「社会的平均的」とは、現存の状態において個々のものを平均したもの(もしくはは平均して得られると考えられるもの)であるが、平均化(作用)とは、現存の状態をつくり変えて行くこと、個々のものの差異をなくし実際に同一のもの平均的なものに変えて行くこと、その過程を指している。この、平均的性質と平均化(作用)との混同は、同じく氏の論説の主要な支柱の一つを成していると考えられる。

(註三) ここでは「一定の程度において」という限定があるが、この限定的意味については全く説明が行われていないのであって、事實上、「第一巻価値論では商品生産における競争は抽象されている」というのが氏の主張であることは、この引用の最後の競争についての説明からもうかがうことができる。だが、第一巻価値論においても競争はけつして捨象されてはいないのであって、そこには第一章価値論の段階における競争の作用がふくまれているのである。そこで捨象されているのは、まさに諸資本の競争なのである。第一巻価値論の段階における競争の役割、その内容は、きわめて重要な意義をもつものであるが、この点の説明については行論にゆづることとしよう。

(註四) ここにも、「熟練および強度の社会的平均度」ということと「熟練および強度を平均化すること」との混同が端的に示されている。

(註五) はかならぬ「平均度」と「平均化」との混同が、第一巻価値論と第三巻市場価値論とを直接結びつけるためにいかに必要欠くべからざるものとなっているか、ということをも、この「暗示的」文章によつてとくとく玩味された。

(註六) 「最も純粹に価値規定を説明する」とは、どういうことであろうか? それは、けつして「需要と供給との一致の前提」などということではないし、「競争の強制の止揚」などということでもない。それは、「資本関係を捨象すること」、「資本の競争を捨象すること」、したがって「簡単な商品生産を前提する」ということである。需給の一致ということは、やはり文句のごとく用いられているが、その深い意味については正しい洞察がほとんど行われていないのが、今日の実状である。この点は行論において詳細に検討されるところである。

③ 「資本が需要供給の法則にしたがって、社会的労働を各生産部門に配分するという現実の姿で、価値法則が貫徹される。」^(註一)したがって、需要供給が一致して、生産物が価値通りに売られるためには、このような労働配分が均衡しているでなければならぬ。このような労働配分が均衡を得ている場合に、各生産部門の生産物は価値をもつて相互に交換されるというのである。このよ

うな均衡は、需要供給の競争の不均衡化の運動の中に、一の傾向として貫かれるのである。したがって、かかる均衡状態は一の抽象である。しかし、現実には不均衡化の運動の中に貫かれてはいる性質の抽象的理解である。価値が純粹に論じられる場合には、このような均衡の状態を考える外に仕方がない。ここでは、現実的に行われる個別的な労働の差異から抽象されることなくしては、このような純粹な形で労働の社会的配分を考えることはできない。第一巻第一章で労働の個性から抽象される所以である。(註二)

需要と供給が一致して作用しなくなったときに成立する均衡とは先にのべたような労働の配分関係が生じた場合である。だから、ここでは、いわば靜的に価値の質が検討される。質的に等一なる人間労働を考える場合に、はじめて量の上における均衡関係が樹立できる。この場合、人間労働の質的等一性を成立させるものも、競争である。(註三)だから、ここでは競争は前提されている。競争によって成立した等一的な人間労働を、これを成立させる力としての競争から抽象して、価値の実体を説明するのが、第一巻における価値論である。それは、より單純なるものよりより複雑なるものへと知識の体系を構成することによって、現実と接近して行くマルクスの方法の当然のやり方であるにすぎない。したがって、第一巻第一章で論ぜられる人間労働の等一性の裏には、この等一性がいかにして、現実と成立しているかの考察があるはずである。われわれは、マルクスがリカードの『剰余価値と利潤』を論ずるに際して市場価値の問題を詳細に繰返してのべるのを見るのである。市場価値論とは、現実には、競争は、いかにして、社会的な人間労働を形成するかを追究するものである。(註四)(前出論文、六四―六五ページ、傍点―山本)。

(註一) 価値法則をもって「均衡的労働配分決定の法則」と解することの誤謬については、すでにさきに拙稿、「いわゆる『労働配分決定の法則』について——価値法則論を中心として——」(本誌、第五巻第一号所載)において詳細に検討したところであるが、このような価値法則にかんする曲解が、当面の問題にたいする誤った解釈と結びついている点に注意が払われなければならぬ。

(註二) 「価値が純粹に論じられる」とは、いったい、どういうことであろうか? 商品価値から剰余価値部分を捨象し、また価値と価格との乖離を捨象して、価値そのものを追究すること以外に、「純粹に論ずる」仕方があつたであろうか? ここに「価値を純粹に論じること」、「労働配分の均衡」および「労働の個性からの抽象」という、三つの異なつた言葉が並べ立てられていることは、まことに意味深いものがあるようである。これら三つの言葉が、第一巻と第三巻との関係、個別的価値と社会的価値との関係の問題についてその説明の中心に据えられていると考えられるところに、重大な問題がひそんでいる。第一巻

は、価値を「純粋に」、「労働配分の均衡の状態を考へて」、「労働の個別性から抽象」して論じているものであり、第三巻は、価値を「純粋に」ではなく、「労働配分の均衡の状態を考へる」ことなく、「労働の個別性から抽象」しないで論じているものである、と。だが、第三巻第十章で論じられているのは、個別労働ではなくして、個別価値である。「労働の個別性」など、全く問題にならぬ。また、第一巻においても、「労働の個別性からの抽象」が先きにあつたのでは、価値形成的労働の本質は理解されえない。各種の個別労働が現存するからこそ、社会的平均的労働なる範疇がはじめて成り立ちうるのである。「労働の個別性から抽象」してしまえば、一般的労働あるのみで、氏の論説の眼目たる社会的平均的労働は存立の余地を見出しなくなってしまう。さらに突つこんで考えれば、二商品の簡単な交換すら、そのままですら、両者に含まれている相異なつた「個別労働の差異からの抽象」を意味する。簡単な商品交換そのものが、価値形成的労働の性格を客観的に示しているのであり、そのことはまた価値そのものをいかに把握すべきかを指し示しているのである。この場合、「純粋に論じる」とか、「労働配分の均衡状態」とか、「労働の個別性からの抽象」など、持ち出す必要は毛頭ない。これら三つの「要件」は、価値そのものを把握するためにも、価値形成的労働の性格を明らかにするためにも、「価値を純粋に論じる」ためにも必要なものではない。それらは、たんに個別価値と社会的価値との関係の問題、いかえれば、価値の「量的」規定の問題を明らかにするためのものではなく、しかも、それ自身においてはきわめて混乱した形でいいあらわされているものである。「労働の個別性からの抽象」という言葉そのものが、すでに「価値」と「労働」との混同を示してあまりあるものである。

(註三) 「人間労働の質的等一性を成立させるもの」は、はたしてたんなる競争であろうか？ ここには理論的にみて、一箇の重大な問題がふくまれていると考へられる。このように競争の力を拡張して解釈するときには、およそありとあらゆる経済現象の根柢は競争に帰着させられることにならないであらうか？ ところが、事実はいかゞ簡単ではないのであつて、氏の論説で述べられているような競争ならば、むしろ反対に、競争は「人間労働の質的等一性」の上こそはじめて成り立ちうるもの、とさへいうことができるのである。さきに(註二)でのべたように、二商品の交換そのものが、すなわち両者の等置関係そのものが、まさしく「人間労働の質的等一性」を客観的に示しているものではないか。どのような交換がおこなわれようと、いかえれば競争がどのようなであれ、——競争があらうとなかろうと——商品交換そのものが、「労働の個別性からの抽象」であり、「人間労働の質的等一性」の「現出」、ないしは実証にはかならない。より根本的にいうならば、価値そのものが、「人間労働の質的等一性」、「労働の個別性の抽象」および「社会的平均的労働」と分ちがたく結びついているのである。簡単な商

品交換を分析して「価値」を純粹に考究するには、「労働の均衡的配分」も「競争」もかえって有害無用の長物である。ここで「人間の労働の質的等一性」といわれていることの客観的内容は、個別的価値が社会的価値に「等一化」されてゆくこと——さきの「平均化作用」——にほかならないのであって、ここにも、「労働」と「価値」との混同、価値についてのいわば「質的」規定の問題と社会的「量的」規定の問題との混同が明らかに看取されるのである。ここにいわれているような競争が成立させるのは、個別的価値の社会的価値への「等一化」であり、その「平均化作用」である。

(註四) 「人間労働の等一性がいかにして現実に成立しているか」、「いかにして、社会的平均的な人間労働が形成されるか」といえば、それは、ほかならぬ二商品の簡単な交換、その等置関係によつてである。「社会的平均的な人間労働の成立」は、実に、交換Ⅱ等置関係がこれを示している。別の面からいえば、個別的労働の個別性が捨象され「社会的平均的労働」として「等一的な人間労働」とならないかぎり、交換Ⅱ等置関係は成り立たない、ともいうことができるのである。かくして、ここにも「労働」と「価値」との混同が一貫していると考えられる。ただし、市場価値論は、文字通り、市場にある諸種の個別的価値から「いかにして等一の社会的価値が成立するか」、「いかにして社会的平均的な価値が成立するか」を明らかにするものでなければならぬからである。

④「したがって、マルクスは各生産部門に配分された人間労働が、価値の社会的性質を、各生産部門においていかに実現するかをヨリ具体的に説明しなければならぬ。同種商品が個別的に異つた生産諸条件(マルクスが、生産諸条件と労働の熟練と強度という風に分けて考えているのを簡単にのべるために、私はしばしば生産諸条件という言葉で代表的に表わす^(註二))。詳しく言う場合にはマルクスと同じく三つの概念を分けている)をもつて生産される場合、個別的に行われた労働がいかにして抽象的になく、具体的現実的に社会的性質をもつかを考察すれば、個別的な労働と社会的な労働とを考えざるを得ない。社会的価値は、本来いかにして社会的であるかを考える場合には、個別的価値がいかにして社会的価値たる性質をうるかということが問題となる^(註一)。同一生産部門内においてこれを説明しようとしたのが、後で説くように市場価値論である」(前出論文、六七ページ、傍点——山本)。

(註一) 本引用の最後において(註一)を附けられた箇處に注意されたい。「価値の社会的性質」と「個別的価値が社会的価値たる性質をうること」とは、まったく異なった事柄である。「価値が、本来いかにして社会的であるか」という問題は、その

最深の基礎として、向坂氏によつてこのんで引用されるマルクスのクーゲルマン宛て（一八六八年七月十一日付）手紙の一節——「あえて一年といわず、二、三週間でも労働が停止すれば、どんな国民でもこのらず死んでしまふであろうことは、どんな子供でも知っています」（ただし、この手紙の内容をいかに正しくとらえるべきかについては、本誌第五卷第二号所載の拙論「交換価値と価値」を参照されたい）——の中で述べられている社会的自然法則をもっていると考えられる。右の問題は、要するに、社会存続の条件としての社会的な労働の意義を、私的所有という特定の条件の下で、いいあらわしたものにすぎない。これにたいして、「個別的価値がいかにして社会的価値になるか」ということは、氏のいわゆる「平均化作用」のことであり、量的に異なる諸個別的価値が等一の社会的価値に平均化されることを示すものである。「個別的に行われた労働がいかにして社会的性質をもつか」ということと、個別的価値がいかにして社会的価値たる性質をもつかということが、簡単に同一視され、等置されているところに、やはり、「価値」と「労働」との混同が端的に示されている。

（註二）「簡単にのべるために」という理由にもとづいて、「生産諸条件」と「労働の熟練と強度」とをあわせて、「生産諸条件」というたつた一つの言葉で表わすことは、理論的にみてきわめて重大な問題をふくんでいる。それは、なによりもまず、何故にマルクスが「生産諸条件」と「労働の熟練と強度」とをことさら明確に区別して述べているかということについて、当然払われるべき洞察にまったく欠けていることを端的に示している。価値を「純粹に」究明するためには、したがつてまた、『資本論』第一卷第一章において「価値の实体および価値の大いさ」を究明するにさいしては、「生産諸条件」と「労働の熟練と強度」とを明確に区別することが絶対に必要なのであつて、これら兩者の内面的意味を正しく把握することなしには、マルクスの価値規定にかんする説明は、とうてい正しく理解されえないのである。この点については、本稿の「三、第一卷第一章における価値規定の問題」の中で立ちいつて論究することにしよう。

⑤ 「マルクスは、市場価値論で、商品生産における社会的総労働の概念と価値形成労働の平均的性質とを明かにした。そして現実には個別的労働が、いかにして社会的平均的労働として価値形成的であるかを説明した」（註二）（前出論文、七〇ページ、傍点一本本）。

（註一）マルクスが第三卷の市場価値論で述べているのは、社会的価値（市場価値）の平均的性質であつて、価値形成労働の平均的性質ではない。価値形成的労働の平均的性質は、第一卷第一章においてあますところなく明確にされているのである。「価

値形成労働の平均的性質」といわれていることの客観的内容は、つぎの引用⑥の中で主張されているところの、諸種の個別的価値がひとつ社会的価値を「形成」すること、氏のいわゆる「平均化作用」と同じことである。ここにも、「価値」と「労働」との、「平均的性質」と「平均化作用」との混同がみられるのである。

(註二) 「現実には個別的労働が、いかにして社会的平均的労働として価値形成的であるか」は、マルクスが第一巻第一章第一節において詳細に説明を与えているところである。市場価値論で述べられているのは、「現実には個別的価値が、いかにして社会的平均的価値として社会的価値を形成するか」ということである。

⑥ 「第一巻でマルクスは、社会的価値が単純に『社会的平均諸条件のもとに生産される大量の同種商品』によって決定されるのとべていることが、第三巻では、この『社会的平均的諸条件』が^(註三)どういふ風が存在し、それらがどんなメカニズムによって社会的価値又は市場価値を形成するかを三つの場合として明かにしている。市場価値は、このようにして同一生産部門の各種の生産諸条件をもつ諸商品が、社会的に平均されること^(註三)によって成立するのである」(前出論文、一〇六ページ、傍点―山本)。

(註一) 「生産諸条件」と「労働の熟練と強度」との、異なった内容をもつ二つの言葉がたった一つの「生産諸条件」という言葉の中につめこまれてしまったことは、さきに引用④において見たとおりであるが、そのような「生産諸条件」へのつめこみがなんのために強行されたかということが、ここではしなく暴露されているようである。第一巻第一章第一節の価値規定にかんする周知の説明においては、「社会的・標準的な生産諸条件」と「労働の熟練および強度の社会的平均度」が問題であった。この場合、「生産諸条件」と「労働の熟練および強度」とのいづれにより多く力点がおかれているかといえば、それは後者、すなわち、「労働の熟練および強度」の上にと、考えなければならぬであろう。なぜならば——本稿の「三、第一巻第一章における価値規定の問題」の中で詳細に説明されるように——ここでの問題の重点はひとえに価値形成的労働の質を規定することにあるからである。ところが、第三巻第十章の市場価値論では、何が問題かといえば、個別的価値と社会的価値との関係である。マルクスが「優良」、「中位」および「劣悪」の三条件を挙げているのは、諸個別的価値の量的差異を示すためであつて、個別的労働の差違や「労働の熟練および強度」の差異を示すためではない。第一巻第一章での問題が「労働の熟練および強度」の社会的平均度であるのにたいして、第三巻で問題となっているのは、諸個別的価値の平均化、平均価値である。ところが、「労働の熟練および強度」が「生産諸条件」の中に呑みこまれてしまうことにより、第一巻でも「社会的平均的諸条

件」が問題であり、第三巻でも同じく「社会的平均的諸条件」が問題である、両者の間には本質的差違はなく、あるのは「純粹に」「抽象的に」と「ヨリ具体的に」との間のちがいにすぎない、という誤った主張が簡単にでき上るのである。しかし、このような「生産諸条件」の使い分けは一種のすりかえ、ともいふべきものである。

(註二) この「社会的に平均される」という場合に、「平均される」ものは、いったい、何であるか？ それは、「諸種の生産諸条件をもつ諸商品」の「諸個別的価値」を措いて、他にありうるだろうか？ 「価値が社会的に平均される」とこと「社会的平均的諸条件」とは、たがいに直接関係がないばかりか、見方によつては、むしろ両者は相容れないものといふべきである。「社会的平均的諸条件」なるものが現に存しないからこそ、いいかえれば、生産諸条件がそれぞれ異なつていて「平均化」されてしまつていないからこそ、諸商品の個別的価値はそれぞれ異なつているのであり、また、このように諸商品の個別的価値がちがつているからこそ、「社会的に平均される」ことが生じ、したがつて、個別的価値とは異なる社会的平均的価値が成り立ちうるのである。右によつても、「価値」と「労働」との混同が、不可避免的に「社会的平均度」と「平均化作用」との混同と結びつかざるをえないということは、明らかである。

⑦ 「……市場価値の理論は、これらの一切の機構を明瞭ならしめるものである。……このことは、同時に、生産諸条件を異にして同一商品の価値が、現実にかかにして社会的平均的なるものとして己れを貫徹する(註一)ことを明らかにすることになつていゝる。市場価値論は、抽象的に規定された価値を、ヨリ、具体的な性格として理解せんとするものである。価値は社会的平均的なるものであるが、具体的にはかかる社会的平均的なるものが、いかにして形成されるかを、市場価値は明かにしているのである」(註二) (前出論文、一一一ページ、傍点—山本)

(註一) 「価値が社会的平均的なるものとして己れを貫徹する」とは、いったい、どういふことであらうか？ この引用⑦から二ページ足らず先きのところでも、「市場価値は平均的なるものとして価値の社会的性質を表現する」と述べられている。これら二箇の文章は、一見深遠な意味をふくんでいるかのように思われ、そのため、「価値は社会的平均的なるものである」といふことが簡単に肯定されざるをえないようになる。だが、これらの文章にたいして、つぎの正しい文章を対置するときには、右の一見深遠な文章も実はまことに簡単なことを誤つていいあらわしたのであることがわかる。それは、「競争そのものが、異なつた個別的価値をもつ同一の諸商品にたいして、同一の市場価値を打ち樹てる」といふことである。

(註二) 価値が「社会的」なものであることは、もとより議論のないところであるが、しかしその内容は——本稿の「三、第一巻第一章における価値規定の問題」の中で詳論されるように、——しかく簡単なものではない。いわんや、それは、「平均的」という文字を付けて「社会的平均的」としてはじめて「社会的」の意味がとらえられるといったようなものではけつてないのである。ところで、「価値の平均的性質」とは何か？ この言葉は、あきらかに、平均的価値と「労働の熟練および強度」の社会的平均度との混同を示すものであるか、そうでなければ、「価値」と「市場価値」との混同を示すものでしかありえない。いうまでもなく、競争こそが、社会的平均的価値を打ちたてるのである。それが市場価値である。「形成される」のは、平均価値、すなわち市場価値であつて、「社会的平均的なるもの」が「形成される」のではない。また、「いかにして形成されるか」といえば、それは、平均価値という言葉によつて端的に示されているのである。だが、注意すべきは、「価値が社会的平均的なるものである」ということと、「平均価値としての市場価値」ということとは、同じ「平均」という文字を配して作られた言葉であるとはいへ、両者はまったくちがった事柄であるということである。この(註二)を附けられた文章は、向坂氏の論説の論理的性格のほどをきわめて明瞭に示しているものといふべきである。

以上は、向坂氏の論文、「市場価値論と相対的剰余価値論」の中から当面の問題に直接関係あると考えらるる箇處を引用したものであるが、なお、氏の著書、『経済学方法論(第三分冊)』の中にも参考とすべき箇處が少くないので、以下簡単に若干の引用をかかけておきたい。

⑧ 「ところで、各生産部門において個別的価値が市場価値に一致するということは、出来るかぎり純粋な姿で価値法則を見ようという理論的な抽象である。現実には同一生産部門内においても、個々の商品が異つた諸条件の下に生産されているからである。したがつて『資本論』第一巻では、個別的価値と市場価値(社会的価値)の問題はありえなかつた。それは、一切の条件を、価値として最も純粋なる姿をとらしめるように、抽象的に定めたからである。

しかし、価値は、本来私的労働が、一般的抽象的性質として交換過程を通じて社会の全労働に包括され、かかる全労働の平均的性質を代表するものとして、価値である。だから、ヨリ現実的に考えると、価値は市場価値、即ち、同一生産部門内の各生産条件下に行われる個別的価値の平均的なるものとして、その社会的性質を実現するわけである(前出書、一一五—一二六ページ、

傍点—山本)。

⑨ 「価値の実体は平均的な抽象的人間労働である。『資本論』第一巻第一章第一節で、マルクスはこうのべている。「けれども、諸価値の実体をなす労働は……(中略—山本)……。社会的に必要な労働時間とは、……(中略—山本)……である」というのである。しかし、社会の現実においては、生産諸条件は各生産部門によって異り、同一部門内においても、同一ではないことと当然である。これらの諸条件を現実、平均的なものにつくり上げて行く過程は、競争である。しかし、いづれにしても、与えられたる時、与えられたる場合においては、この平均化の傾向と共に、生産諸条件の不同が存する。

したがって、価値の本来与えられている社会的、平均的性質の成立を、ヨリ具体的に理解するためには、市場価値の理論があらわれなければならない。それは、価値論において当然与えられているものとして、取扱われたもの(註一)が、市場価値の理論として、ヨリ具体的に説明されるのである。市場価値は、本来社会的である価値が、その社会的平均的性質を顕して行く姿である。それ故に、市場価値の理論は、単純商品生産に妥当するものである。したがって、また、一定の抽象をもつて、資本主義的商品生産に妥当することを論証し得る(註二)。(前出書、一一八一—二九ページ、傍点—山本)。

(註一) 第一巻第一章第一節においてすでに、価値の社会的平均的性質は「当然与えられているものとして取扱われた」という、この主張に注目されたい。だが、ここではじめに引用されている第一章第一節のマルクスの文章が、価値ではなくして、価値を形成する労働の社会的平均的性質を規定していることは、明らかではないか? いったい、第一章第一節のどこで、マルクスは、価値の社会的平均的性質をすでに「当然与えられたものとして取扱って」いるのであろうか?

(註二) 「市場価値の理論は、本来、単純商品生産に妥当するものであって、一定の抽象をもつてでなければ資本主義的商品生産に妥当しない」という、この主張は、理論的にみて、きわめて重大な問題をふくんでいるものである。しかし、さしあたりわれわれは、これについてつぎの二点を指摘するにとどめておこう。すなわち、そのひとつは、第一巻第一章価値論と第三巻第十章市場価値論との間の関連をいかにとらえるかという問題についての、氏の基本的な考え方がここに端的に示されているということである。そしてもうひとつは、右のような独断的主張を裏付けるものとしては、「抽象的」と「具体的」という二つの言葉の使い分け、あるいは、「静的」と「動的」との二つの言葉の使い分け以外にありえないということである。

⑩ 「したがって、両極にある生産諸条件の商品の個別的価値は、中位的価値に均衡化することになる。このために、この商

品の市場価値は、中位的な諸条件の下で生産された商品の価値によって決定される。……この生産部門全体において支出された労働は、平均化されて、過不足がない。かかる平均化された労働は、その生産部門で支出された全労働によって構成されるものである。このように価値を決定する社会的労働は、他の条件を別とすれば、生産者の生産諸条件に対する競争によって、平均化の傾向をすすめられる。かくしてのみ、価値決定労働として考えられたものが具体的には、つくられて行く」（註二）（前出書、一八三ページ、傍点—山本）。

（註一）「平均化」されるのは、氏自身によつてはつきり述べられているように、「個別的価値」であつて、「労働」ではない。ここにも、「価値」と「労働」との混同が示されている。

（註二）「価値を決定する労働」は、すでに第一巻第一章第一節でマルクスがこの上もなく明確に定式化しているごとく、社会的平均的労働であり、「労働の熟練および強度」の社会的平均度をもつ労働である。この「社会的平均度をもつ労働」なるものは、諸種の「労働の熟練および強度」をもつて現存している諸種の個別的労働の平均として——観念的にはあれ——現に存在しているものであつて、これから改めて「具体的につくり上げられて行く」ようなものではない。「つくくり上げられて行く」のは、むしろ、平均価値であり、市場価値としての社会的価値である。

さて、以上①から⑩まで挙げた十箇の引用例を通じて見ても、第一巻価値論と第三巻市場価値論との間の関連に關心する向坂氏の論説の中には、きわめて特異な解釈がふくまれていることが容易に知られるであらう。われわれは、理論的にみて重大な意味をもつこれらの解釈について、その理論的性格を明確にすべく、つぎに論点を要約してかかづることにしよう。

（一）『市場価値を考えないでは、第一巻第一章の価値は考えることはできない。』

第一巻第一章も第三巻第十章も、ひとしく、価値の社会的平均的性質を明らかにしているものである。

第一巻第一章も第三巻第十章も、ひとしく、人間労働の質的等一性を論じている。

第一巻第一章も第三巻第十章も、ひとしく、価値形成労働の社会的平均的性質を論じている。

第一巻第一章も第三巻第十章も、ひとしく、いわゆる「生産諸条件」(「生産諸条件」と「労働の彙練および強度」との両者を同時にふくむもの)の社会的平均的性質を論じている。』

(四) 『第一巻第一章では、価値の社会的平均的性質が、抽象的に、簡単に、「静的に、成立しているものとして」、「純粹に」、「労働配分の均衡状態を前提して」、論じられているが、これにたいして、第三巻第十章では、価値の社会的平均的性質が、「ヨリ具体的に」、「現実的に」、「それが、いかにして形成されるかについて」、「それがいかに実現されるかについて」、「その成立過程が明確に」、「同一商品の価値が、現実がいかにして社会的平均的なるものとして己れを貫徹するかについて」、論じられている。

第一巻第一章では、価値形成労働の社会的平均的性質が、「簡単に」、「労働の個別性から抽象して」、「静的に存在するものとして」論じられているが、これにたいして、第三巻第十章では、価値形成労働の社会的平均的性質が、「現実的に」、「それが、いかにして形成されるかについて」、「それがいかに実現されるかについて」、「詳細に」、論じられている。

第一巻第一章では、人間労働の質的等一性が、「抽象的に」、「労働の個別性から抽象して」、「必要なる限り」、論じられているが、第三巻第十章では、人間労働の等一性が、「具体的に」、「いかにして現実に成立しているかについて」、「それがいかに実現されているかについて」、明らかにされている。

第一巻第一章では、「社会的平均的條件」が「簡単に」、「抽象的に」述べられているが、これにたいして、第三巻第十章では、「社会的平均的條件」が、「具体的に」、「現実的に」、「それがいかに存在するかについて」、「それがいかに

に形成されるかについて」、述べられている。

第三巻第十章では、「社会的価値の成立」が、第一巻におけるよりもヨリ明確にのべられている。』

見られるとおり、第一巻第一章価値論と第三巻第十章市場価値論との間の関連なるものは、向坂氏の論説にしたがえば、すこぶる簡單明瞭な、つぎの一事に帰着するのである。それは、すなわち、兩者とも、ひとしく、価値の社会的平均的性質を説明しているものであるが、ただ、第一巻第一章価値論が抽象的に、簡単にのべているのを、第三巻第十章市場価値論が具体的に、現実的に明らかにしている点だけがちがう、というのである。兩者ともに価値の社会的平均的性質を説明していて、剰余価値や利潤にふれないのであるから、第一巻第一章価値論も第三巻第十章市場価値論も、どちらもそのまま單純商品生産に妥当するものであって、資本主義的商品生産には「一定の抽象をもって」でなければ、妥当しえないものであるという、氏の結論が引き出されるのは、けだし、理の当然といふべきである。

第一巻第一章価値論と第三巻第十章市場価値論とのそれぞれの課題、および兩者の間の関連について向坂氏の論説を要約すれば、大要以上のごとくであるが、これについて、さてわれわれはどのように考えるべきであろうか、ということが問題となる。右に要約して示されたような、当面の問題にたいする氏の解釈は、本質的にいって、はたして誤りないものであろうか？ すでに引用に附けた簡単な註記を通じても知られるように、氏の論説にあらわれた解釈は、いかんながら、きわめて正しくないものをふくんでいる、といわなければならない。第一巻第一章も第三巻第十章もひとしく価値の社会的平均的性質を明らかにするものであるという主張も正しいとはいえないが、兩者の関連を「抽象的」と「具体的」という二つの言葉の間の関連と同じものとする解釈は、なおそれ以上に、正しくないものである。第一巻第一章第一節の価値論は、一定の生産関係を前提して、価値を究明すること、より詳しくいえば、な

によりもまず価値の実体および価値の大きさを究明することをその基本的課題としていることは、周知のところであり、これにたいして、第三卷第十章市場価値論では、第一卷第一章価値論の場合とは異なった生産関係のもとで市場価値を究明すること、より詳しくいえば、異なった資本の生産物たる諸商品の諸個別的価値と市場価値との間の関係を説明することが眼目となつてゐることも、異論のないところである。この場合、第一卷第一章価値論の中にも第三卷第十章市場価値論の中にも、ひとしく、「社会的平均的」という言葉は用いられてはいるが、しかしそれらの意味するところがまったく異なつてゐる点に特別の注意を払ふ必要があるのである。この場合には、なによりもまず、第一卷第一章価値論と第三卷第十章市場価値論との内容、それらの課題を、一応別箇に究明することが先決問題であり、そのためには、『資本論』全体の理論的な骨組を正しく把握することが必要なのである。ところが、これらの先決問題にふれることもしないで、ただ、「社会的平均的」という文句にのみ注目して、両者の課題を同じものと考え、その内容上のちがいは「抽象的」と「具体的」とのちがいと同一ものであるかのように思いこむことは、理論的に正しくないばかりか、すこぶる危険な独断以上に出ないものといわなければならないであらう。

しかしながら、「社会的平均的」という言葉を主軸として右のような独断的結論が簡単にひき出されるようなことはとうていありえないのであって、そこには、なお重要な論点にかんするいくつかの本質的な誤解ないしは混乱が介在してゐて、それらが右のような結論と必然的に結びついているものと考えなければならぬ。さきに挙げた多くの引用例についても、このことは明瞭に看取されるのであって、以下、そのとくに重要なものについて簡単な検討を加へることにしよう。

一 「労働」と「価値」との混同、または「すりかえ」。

氏の論説の中では、その最初から最後にいたるまで、ほとんどいたるところで、「労働の社会的性質、労働の平均的性質」、「労働の一般的性質」という言葉と、「価値の社会的性質」、「価値の平均的性質」という言葉とが、いりみだれて用いられ、これら両者は厳密に区別されるどころか、かえって同一の内容をもつものとされている。さきに引用に附した註記によっても明らかなく、「労働の社会的平均的性質」と「価値の社会的平均的性質」とは、まったく異なった二つの事柄である。内容は根本的に異なったものだ、といっても過言ではないのである。このことは、前者の「労働」の上に「価値」という言葉をくっつけて「価値形成的労働」というように言葉を規定してみても、事態にはいささかも変りはない。この場合、「価値形成的労働」といっても、要するに、それはあくまで「価値を形成する」ところの「労働」であって、「価値」ではない。「価値」とは、この種の「労働」が生産物に対象化したものなのである。価値の実体と価値とは、二つのまったく異なった事柄である。のみならず、問題はなお、「社会的平均的性質」という言葉についても残っていることに注意すべきである。「価値形成的労働」の「社会的平均的性質」という場合の「社会的平均的性質」は、第一巻第一章第一節の中にある社会的平均的労働にかんする周知の規定によって説明されているところである。この場合、「社会的平均的性質」の重点が労働の質的規定の上に、すなわち「労働の熟練および強度」の上におかれていることも、すでに述べたとおりである。だが、これにたいして、「価値の社会的平均的性質」とは、いったい、どんなことを指しているであろうか？ 価値が価値形成的労働の、すなわち社会的平均的労働の対象化したものであることは、つい先きに述べたとおりであるが、しかし、価値そのものの中に、どこをついたら「平均的」という性質が出てくると考えられるであろうか？ この場合、考えられうることは、価値の量についての平均ということ以外にはありえないであろう。すなわち、諸種の異なった価値量をもつ諸個別的価値が「平

均化」されること、かくして平均価値としての社会的価値、同一の市場価値が打ちたてられることである。だが、ここでは個別的価値といえども価値であることには全く変りないのであるから、一般的に「価値の社会的平均的性質」などという、紛らわしい言葉は理論的には用いるべきではない。明確に「社会的価値または市場価値の社会的平均的性質」といふべきである。ところが、「価値の価値的平均的性質」というかわりに、はっきり「社会的価値または市場価値の社会的平均的性質」という言葉を用いたとすれば、この言葉の同義反復的性質——「社会的平均価値の社会的平均的性質」——はあまりにも明白であって、論説を飾るものとしてはいささか手にあまるものとなる。氏の論説においては、とくに「価値の社会的平均的性質」という、微妙な——意味深長な——言葉を、ぜひとも用いる必要があるのである。この「価値の社会的平均的性質」という言葉以外には、第一巻第一章価値論と第三巻第十章市場価値論とを「直結」させるに適當なものはまったくないからである。また見方を変えて、「価値の社会的平均的性質」という言葉は、マルクスの「一商品の現実的価値は、その個別的価値ではなく、その社会的価値である」という文章の内容をいあらわしたものであるとしても、このような表現の仕方は、きわめて不正確であり、曖昧なものだといわなければならない。ことに、市場価値論が一方では「いかにして社会的平均的な人間労働が形成されるかを追究するもの」であるとされながら、他方で、それは「価値の社会的平均的性質がいかに形成されるかを説明しようとするもの」であると主張されている点などを考え合わせるとき、「労働」と「価値」との混同ないしは意識的「置きかえ」は明白であり、したがって、「価値の社会的平均的性質」という言葉も、一見マルクスの文章の内容を別にいあらわしたものであるような体裁をとりながら、実は「労働の社会的平均的性質」との混同ないしは意識的「置きかえ」を旨指しての独特の用語であると見なければならぬのである。

二 「平均」と「平均化作用」との混同。

「社会的価値または市場価値が平均価値である」という場合の平均、あるいは、「社会的価値の平均的性質」という場合の平均、ということは、価値の大きさを異にする諸個別的価値が現に存在していることを前提とし、これらの異なった諸個別的価値の総平均として観念的に考えられたもの、あるいは、現存する諸個別的価値を総計し平均して得られたものとしての平均を示すものにほかならない。したがって、これは現存するものの平均として「現存」するものであって、これから形成される必要もなければ、いかにそれが形成されて行くかなどということも問題にはなりえない。すでに平均は行われており、平均した結果として得られた平均なのである。ところが、氏の論説の中では、右のような意味をもつ「平均」という言葉が、——意識的にか無意識的にか——「平均化されて行くこと」、すなわち「平均的なものの形成の過程」と混同されているのである。たとえば、「価値の社会的平性的性質が、いかにして成立するか」(引用②)とか、「価値の実体たる労働の社会的平性的性質が、いかにして形成されるか」(引用②)とか、「現実にかににして社会的平均的なるものとして己れを貫徹するか」(引用⑦)とか、「社会的平均的性質を現実につくり上げる」(前出論文、一一二ページ)とか、あるいは、「社会的労働の平均化の傾向」(前出論文、九四ページ、傍点—山本)とかいったような、各所に散見する特異な用語例は、「平均」そのものと「平均化されて行くこと」との明白な混同を示しているものである。

三 「生産諸条件」について曲解と誤用。

さきに引用④においてみたように、「マルクスが、生産諸条件と労働の熟練と強度という風に分けて考えている」のにたいして、「分けて考える」ことをせず、「生産諸条件」という一箇の言葉で「代表的に表わす」方がより適切で

あると主張する論説は、きわめて重大な問題をふくむものである。

周知のように、マルクスは、第一巻第一章第一節での価値規定的労働の説明にさいして、「現存の社会的・標準的な生産諸条件と労働の熟練および強度の社会的な平均度」と述べている。このようにここでは「生産諸条件」と「労働の熟練および強度」とが並置されているため、これを皮相的に読むときは、右の両者は同等の意義を与えられているものと早合点しがちであるが、このような判断は、そもそも、価値規定的労働の説明の眼目はどこにあるかということと理解しえない独断といわなければならぬ。ここでの眼目は、価値を形成する労働そのものの質を規定することにある。労働の質は、「労働の熟練および強度」によってあらわれされる。ここでマルクスが、「生産諸条件」には「社会的・標準的」(gesellschaftlich-normalen)、「労働の熟練および強度」には「社会的平均度」(gesellschaftlichen Durchschnittsgrad)と二つに異なる言葉を使い分けているのは、それだけの正当な理由があったからであり、この点をまず明確にとらえねばならない。これについての立ちいった説明は本稿の「三」にゆづることとするが、ここでは、さしあたり、右のような、「標準的」と「平均度」とのはっきりした区別は、「労働の熟練および強度」をもってもとも基底的な要因であるとなすマルクス自身の見解にもとづいていることを指摘するにとどめておこう。それにもかかわらず、「標準的」を「平均的」におきかえることによって「等一視」の根拠をつくり出すばかりでなく、すんで肝腎の「労働の熟練および強度」を「生産諸条件」の中におしこむことによってこの前者を「解消」させてしまい、「生産諸条件」だけを「代表的なもの」として残しておくというような「観念的」——（これは、「言葉の上で、だけの」と読みたい）——操作をあえてなす者ありとすれば、これを、いったい、なんと評したらよいであろうか？ なぜ、このような「等一化」があえて強行されたかといえは、それは、さきにみたように、第一巻

価値論と第三巻市場価値論との間の関連が、きわめて皮相的に、「観念的」にのみ、とらえられているからである。第三巻第十章市場価値論でとり上げられている個別的価値の「組合せ」Ⅱ「平均」の問題において、個別的価値の差異を規定するものは、まさしく生産諸条件であり、優良、中位および劣悪の三つの生産諸条件が挙げられている。そして、ここでは、「労働の熟練および強度」はまったく消え失せてしまっている。そこで、第一巻第一章価値論でも、「生産諸条件」という文字があり、第三巻第十章市場価値論では「生産諸条件」という文字しかあらわれていないのであるから、この「共通に」あらわれる、「生産諸条件」という文字に注目して、第一巻価値論においても「生産諸条件」の「社会的平均的性質」が問題であり、第三巻でもひとしく「生産諸条件」の「社会的平均的性質」が問題である、というように、簡単に両者を結びつけて解釈しようとする衝動に駆られがちである。だが、このような考え方は、第一巻価値論において問題となっているのは何か、第三巻市場価値論において問題となっているのは何か、ということをもまったく理解していない皮相浅薄な「観念的」解釈であるといわなければならない。だが、いづれにせよ、われわれの関心をひくのは、このような「生産諸条件」についての皮相な「観念的」解釈が、第一巻価値論と第三巻市場価値論との間の関連についての同じく皮相な「観念的」解釈と、かたく結びついているということである。

マルクス価値論の正しい把握にとっては、何故に、第一巻第一章ではまさしく「労働の熟練および強度」の上に、これに反して第三巻第十章ではまさしく「生産諸条件」の上に、それぞれ重点が異なっており、おかれなければならないか、ということ洞察することが、決定的な意義をもっているのである。かくして、第一巻第一章価値論の内容と第三巻第十章市場価値論の内容とが本質的に異なったものであることが、右の問題の正しい理解にもとづいて、はじめに正当に把握されるのである。

四 生産価格と市場価値との関係についてのきわめて特異な解釈。

第一巻価値論と第三巻市場価値論との間の関連についての氏の論説の中には、生産価格にふれている部分が少くないが、この生産価格についての説明の中にも、やはり相当に問題が含まれているようである。とくに、生産価格と市場価値との関係についての特異の解釈を示す例として、つぎに簡単な引用を挙げてみよう。

「生産価格は、ちがった生産部門間における資本の競争がつくり出すものである。資本は、『等しい資本に対する等しい利潤』をとという原則を中心にして競争する。このことが、各資本の大きさにしたがって全社会に存する剰余価値を分配することになる。即ち、この競争によって、一般的な利潤率が生じ、各資本の大きさに比例して、全社会に存する全剰余価値の分配が行われる。^(註)この結果、生産価格は、価値から、即ち、市場価値から恒久的に乖離する。原則は、両者の一致ではなくして、乖離である。しかし、この乖離自身が競争の結果である。即ち、資本の競争の結果である。本来相異していた各生産部門間の市場価値を平均して、全社会の総剰余価値を分配することによって、生産価格を成立させる。このことによつて、価値の社会的平均的性質が貫かれる。この競争がなしとげることが、市場価値の相異によつて生ずる資本の不平等を是正することである。各生産部門における生産諸条件の不等から生ずる市場価値の相異は、生産価格の法則による資本の各生産部門への運動の可能によつて均等化される。事実上の生産諸条件の相異から生ずる市場価値の不等を、均等なる性質として表現させようというのが、生産価格の成立に外ならない。資本のより大なる利潤への運動は、平均利潤の成立という形態による以外に、全社会の総労働を各生産部門に配分する方法をもたず、価値の平均的性質を貫く仕方を知らないものである。このようなやり方は、いわば資本によつて無理強ひになされる平均の成立である」(前出論文、九五ページ、傍点―山本)。

(註) 「資本は『等しい資本に対する等しい利潤』をとという原則を中心にして競争し、そのことによつて、一般的な利潤率が生じ、各資本の大きさに比例して、全社会に存する全剰余価値の分配が行われる」という主張は、きわめて問題あるものである。資本が競争するのは、資本が競争するのは、「等しい資本に対する等しい利潤」をいうような原則を中心にしてではない。資本が競争するのは、一方では、「最大限の利潤」を獲得せんがためであり、地方では没落の脅威をもつての競争の強制律によつてである。また、「等しい資本に対する等しい利潤」をいう原則を中心として行われる競争によつて一般的な利潤率が生ずるといふことも、適切

とはいいたい。けだし、一般的利潤率なるものは、現に形成されて存在しているというようなものではなく、ただひとつの傾向として、いいかえれば、平均的に「観念的に」のみ、存しうるにすぎないからである。つねに存在するのは、一方における超過利潤の獲得と他方における利潤の喪失(または欠損)とである。

右の引用の中でとくに注意を要するのは、生産価格が市場価値から恒久的に乖離する、という主張である。市場価値こそは「現実的価値」であり、しかもそれがほかならぬ価値の社会的平均的性質を貫徹するものであるという主張は、氏の論説の中でくりかえし強調されたところである。ところがここでは、そのような市場価値から恒久的に乖離する生産価格であるにもかかわらず、この生産価格は「本来相異していた各生産部門間の市場価値を平均することによって成立し、しかも、この生産価格によってはじめて価値の社会的平均的性質が貫徹される。ということが主張されるのである。これまでの論説にしたがえば、市場価値こそ、価値の社会的平均的性質を實現するものであり、「生産諸条件を異にしている同一商品の価値が、現実、社会的平均的なるものとして己れを貫徹」しているのである。また、市場価値こそは、「社会的平均的生産諸条件」が現実、貫徹されているところのものである。ところがここでは、「各生産部門における生産諸条件の不等」から「市場価値の相異」なるものが生じ、しかも、この「生産諸条件の相異から生ずる市場価値の不等」なるものが、現実的価値たる市場価値からは恒久的に乖離している生産価格によって、はじめて「均等なる性質として実現」させられることができ、市場価値からつねに乖離する生産価格が成立しなければ、価値の平均的性質はつらぬかれえない、という主張がなされるのである！

だが、「本来相異している各生産部門間の市場価値」とか、「生産諸条件の相異から生ずる市場価値の不等」とかいったような言葉は、いったい、なにを意味しうるであろうか？ 市場価値というものは、一商品の価値についてののみ、

したがって、一生産部門の内部においてのみ、問題となりうるものである。同一生産部門内においてのみ、平均価値として、市場価値は存立している。たとえば、A、B、Cの三つの異なる生産部門があると、それぞれの商品の市場価値を一〇〇、八〇および六〇としよう。Aの一〇〇はA部門内の商品の総平均価値として存在しており、Bの八〇、Cの六〇についても同様の事情にある。Aの一〇〇がらばに市場価値＝平均価値であることは、Bの八〇、Cの六〇とまったく同じである。この場合、A、BおよびCの各生産部門の生産諸条件が異なっていることは当然であって、異なっていればこそ、それぞれ異なった市場価値をもつ異なった商品が生産されているのである。これらの三つの市場価値を「比較」したり、「平均」したりすることは、どんな意味があるであろうか？ それら三つの「不等」などということは、およそ問題とはなりえない。「不等」という言葉が用いられているところからみれば、この場合考えられるのは、各個別的生産部門における特殊的利潤率の不等ということである。おそらく、ここでは、各生産部門間の個別的利潤率の不等が市場価値の不等と混同され、個別的利潤率の平均化と市場価値の平均化とが、無原則的に混同されているのである。

見られるとおり、価値の社会的平均的性質を「実現」し「貫徹」しているはずの市場価値が、これはまた、生産価格の成立を通じて「平均」化され、市場価値の「不等」が生産価格のおかげで「均等なる性質として実現」されることになり、かくして、これまでの論説で市場価値に与えられていた肝腎の役割は、すべて生産価格によってとって代わられる、ということになるのである。これでは、市場価値論は、たんに生産価格論の前座をつとめるだけのものになりかねない。ところが、向坂氏は別の箇処では、つぎのように、市場価値論こそ真打であって、生産価値論はその前提の役割を果すものであると主張されるのである。

「……かくして、生産価格論の後に、或は生産価格論を前提として、平均価値論がなされている」(前出書、一七九ページ、傍点—山本)。

以上の簡単な検討を通じてみても、向坂氏の論説で眼目とされている「価値の社会的平均的性質」なるものが、結局、市場価値について論証されているのか、生産価格について論証されているのか、きわめて不明確である上に、少なからぬ混乱が見られるということは、否定できないようである。そればかりでなく、ここでとくに注目されるのは、以上のような生産価格と市場価値との関係の説明において、市場価格という言葉が一度も登場してこないということである。マルクスにあっては、第三巻第十章の表題——「競争による一般的利潤率の均等化。市場価格と市場価値。超過利潤」——によってもうかがわれるように、平均利潤したがってまた生産価格の問題は、市場価格と市場価値との関係、その意義の問題とかく結びついているのである。それゆえ、生産価格の本質は、市場価格をぬきにして、たんに市場価値ひとつとの関係においてみただけでは、これを正しく把握することはとうてい覚束ない。この場合、市場価格の意義は市場価値のそれにくらべてけつして劣っているものではなく、見方によっては、むしろ市場価格の意義が決定的であるときさえいいうるのである。このように当面重要な意義をもつ市場価格がまったく除外されてしまっているということは、上に述べたような生産価格そのものについてのきわめて特異な解釈、および生産価格と市場価値との混同と、相互に条件づけあっているものと考えなければならぬであろう。さらにこのことを敷衍するというならば、向坂氏の論説における特異な生産価格論は、氏の市場価値論の科学的意義を特徴づけるばかりでなく、ひろく、『資本論』全体の構成をどのように理解しているものであるか、その理解の性質または限界をそのまま特徴づけるものといえることができると考えられるのである。

さて、以上によって、第一巻価値論と第三巻市場価値論との関連の問題について、向坂氏の論説がこれにたいしてどのような解釈を与えているものであるか、その解釈の理論的内容について簡単に検討し、その性格または特徴ともいべきものをほぼ明らかにすることができたであろうと思われるので、われわれは、さらに当面の問題の把握にあって、とくにそれがどれだけの理論的拡がりをもつものであるかをよりよく理解する上にとつて、少なからず参考になると考えられる遊部久蔵氏の論説につきに検討することにしよう。

二 価値論における第一巻と第三巻との関連についての解釈(2)

価値論における第一巻と第三巻との関連の問題についての遊部久蔵氏の解釈を示すものとしては、氏の主著『価値と価格』の「第二篇 商品の価値」の中に問題にたいするまとまった説明が見出されるので、さしあたり、その簡処を一括してつきにかかげ、つきにその各部分の内容を検討してゆくことにしよう。

氏の著書の「第二篇 第一節 商品分析の第一段階——使用価値と価値の対立」の「B 使用価値と価値との対立」は、ほとんど第一巻第一章第一節からの抜き書きから成っており、この抜き書きについての氏の註釈といったようなものがその論説の骨組をなしているのであるが、ここでは、価値規定にかんする周知のマルクスの文章——「一商品の価値の大きさを規定するものは、社会的に必要な労働時間である。」「社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的な平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するために必要とされる労働時間である。」——がそのままかかげられ、これについて、つきのような氏自身の説明が与えられ

ているのである。

「したがって同一種類の商品を生産するに要する労働時間の差異をもたらず主観的条件(勤惰、熟練不熟練)や客観的条件(労働条件)の差異はこの際捨象(!?)される。まさに(交換)価値の比率を規制するものは労働時間の比率であると述べたが、この労働時間たるや右のごとき社会的必要労働時間である。

しからばいかにして社会的必要労働という範疇は可能(!?)であるか?

蓋し社会の総労働力は無数の個人的諸労働力から成り立っているが、その商品世界の価値に関連するものとしては、一個同一の人間労働力としての意味をもち、個々の個人的労働力は一つの社会的な平均労働力たる性格を帯び、且つかかる社会的な平均労働力として作用するからである。(註一)

一定生産部門の社会的必要労働時間とは前述の如く該生産部門全体について生産諸条件と労働の熟練及び強度とを平均化したものをいうのであるが、それは結局当該生産部門の生産物中最大多数を供給する企業の個別的・生産諸条件と労働の熟練及強度とによって代表される。したがって、(!?)社会的必要労働時間は該生産部門の生産物中最大多数を供給する企業の個別的労働時間に一致する傾向がある。

これを例示すると左の如くである。

一定生産部門に関してA、B、Cの三企業があり生産諸条件と労働の熟練及強度とがそれぞれの企業について優等、中等、劣等であるとす。そしてA、B、Cそれぞれの企業において一個当りに要する労働時間(個別的労働時間)を二、五、八時間とする。そして該生産部門の生産総額は五〇個であつて、そのうちA、B、Cの占める割合が一〇、三〇、一〇個であるとする。その生産物一個当りの社会的必要労働時間は五時間となるであらう。蓋しA、B、Cの個別的総労働時間はそれぞれ二〇(2×10)、一五(3×5)、八〇(8×10)時間であるから、当該生産部門の総労働時間は二五〇時間となる。これを総数五〇で除すと五時間が平均的に要する労働時間としてでてくるであらう。しかるにこの平均的必要労働時間(五時間)は丁度当該生産部門において三〇個(六〇%)と最大多数を占める企業の個別的労働時間(五時間)に丁度一致するのである。……

もちろん中位の企業(B)がいつでも生産物の最大多数を供給するとはかぎらない(!?)。A又はBが最大多数を供給することもあるであらう。これは右の問題を解明する上に、一向差支えない(!?)。要はいずれの企業であつても、最大多数の生産物を

供給する企業の個別的労働時間が社会的・平均的労働時間を規制する傾きがあるということである。

このようにそれぞれの企業の個別的労働時間によって規定された商品価値(?!?)を『個別的価値』と呼び、社会的必要労働時間によって規定された価値(?!?)を『社会的価値』と呼ぶ。この社会的価値の規定はいまだに簡単な商品の価値規定に属するものであるが、資本制生産関係があらわれると社会的価値は市場価値に転化(?!?)する。この両者は内容を同じくする。ただ後者は前者のより、具体的に展開された形態である。(第七章第一節をみよ)。

さきに入れられれば社会的必要労働という範疇がいかにして成立するかをみた。そこで述べられたかぎりでは一見社会的必要労働とはあたかも思惟でのみ得られる理論的なものとして考えられるかもしれないが、決してそうではない。このことは社会的価値の右の例解によってほぼ推察される(?!?)とところであるが、要するに各生産部門に関して価値を規定する労働が現存の社会的標準的生産諸条件と労働の熟練及び強度の平均程度とによって規制される(?!?)ということは、現実の資本制社会において各生産部門ごとに生産諸条件の標準化と労働の熟練及び強度の平均化とが行われることを意味する。むろんこれは各部門について完全に行われるものではない(?!?)が、各生産部門の生産物の最大多数がほぼ同等の労働の熟練及び強度とを有する諸企業——だからしてこれらの諸企業はこれを一括して一つの企業と見做してもよい(?!?)——によって供給されるところまでは進むであろう。このような段階にいたって、社会的必要労働——社会的価値は、『始めて、實際的に、真実に』あらわれるのである。この点、『抽象的労働』についてと同様である。いな、『抽象的労働』は実はこのような意味での『社会的必要労働』と相関関係(?!?)にあるのである。両者とも大工業の相当の発展段階を前提としてその上で商品価値(市場価値)の一方は質的、一方は量的規定をなすにいたる。

しかるに前資本主義経済から資本主義経済への過渡期においては、様々の生産諸条件と労働の熟練及び強度の様々の程度とが存在することがむしろ常識的であって、この場合には範疇として社会的必要労働——社会的価値の成立は困難である。

したがって、社会的必要労働という範疇の定立(?!?)には完全に発達した商品生産即ち資本制生産が前提されるのである。いわゆる労働価値説が資本主義経済の成立過程にうまれたということは決して偶然ではなかつた(?!?)。『相互に独立して営まれる。しかし社会的分業の自然発生的な諸環として相互に全面的に依存しあっている。私的諸労働は、たえずその社会的比率的な尺度に還元される——けだし、偶然的でつねに動揺している私的諸労働の諸生産物の諸々の交換関係においては、それらの生産のために社会的に必要な労働時間が、たとえば家が頭上に崩れ落ちる場合の重力の法則のように、規制的な自然法則として暴力的

に自己を貫徹するから——という科学的な洞見が経験そのものから生ずるためには、その前に、完全に発達した商品生産が必要である。かくしていわゆる労働価値説が十八世紀中葉より十九世紀初頭にかけてほぼ完成された形態(!?)であらわれ得た理由はここにもとめられねばならぬが、このことは同時に範疇としての、『社会的必要労働』の独自の歴史的性格——実存規定——を示すものである。(なお社会的必要労働の例解に、マルクスによって周知の如くイギリスの織物業における蒸気織機の採用がとり上げられていることに注目する必要がある。)(前出、一〇三—一〇六ページ、傍点、ゴシック体および(!?)——山本のも。

見られるとおり、ここに引用された遊部氏の論説の中には、多くの、きわめて重大な理論的諸問題がふくまれているようであるが、すでに向坂氏の論説についてそのあらましの検討をおえたわれわれにとつては、右の遊部氏の論説についてその特徴をつかみとることは、さしてむづかしいことではないであろう。とくに遊部氏の論説が理論的考察にとつてのみならず、論理のおよび心理的考察にとつても貴重な対象であることは、このさい、注意されねばならないが、われわれとしては、さしあたり、当面の問題にかんするかぎりにおいて、主として理論のおよび論理的に必要な意味をもつ論点を若干とり上げて、これに検討の照明をあてることにしよう。

一 まずはじめに指摘されなければならないのは、生産の条件にかんするきわめて特異な解釈である。

価値規定にかんするマルクスの周知の命題がそのまま引写してかかげられた箇処にすぐつづいて、この命題にたいする氏の解釈を与えるにあたって、氏はまず、「同一種類の商品を生産するに要する労働時間」は、「主観的条件(勤惰、熟練不熟練)や客観的条件(労働条件)」の差異によつて、その差異が生ずるものであるとし、右の「諸条件」の差異は、このさい「捨象」される、と述べている。「主観的条件(勤惰、熟練不熟練)や客観的条件(労働条件)」がちがえば、同一種類の商品の生産に要する労働時間が異ならざるをえないのは、いまさらいうまでもないことであ

る。だが、ここでとくと留意しなければならないのは、右の「主観的条件や客観的条件」の差異がもたらすものが、労働時間の相異であつて、価値の相異ではない、ということである。マルクスの命題は明確に、価値を形成する労働について、その労働のいわば質について基本的規定を与えているのに、これにひきかえ、遊部氏の論説では、価値とは無関係に、価値規定とはなんらかかわりのない労働時間について、ただ「主観的条件と客観的条件」がちがえば、労働時間がちがうといったような、当りまえの、まったく愚にもつかぬことが、説明として与えられているのである。

マルクスは、右の価値規定にかんする命題の中で、価値を形成する労働の質を説明し、この上もなく明確に、「現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度」という規定を与えている。すなわち、「生産条件」については「社会的・標準的」、「労働の熟練および強度」については「社会的平均度」というように、別様に規定されているのであつて、この規定の仕方そのものが、この場合もつとも重要な意義をもっているところである。ところが、遊部氏の論説では、「主観的条件と客観的条件」とについて明確な規定が与えられないばかりか、きわめて簡単にそれらの「差異」が「捨象」されてしまふのである。「差異」が「捨象」されれば、「同等な」という規定が残るだけである。「同等な」「主観的条件と客観的条件」のもとでは、「同等な」労働時間を要する、ということになるのは、いまさらいうまでもないことである。だが、これでは、価値形成的労働の質を規定することなど、とうていできることではない。それでは、右の価値規定にかんする命題のすぐ前でマルクスが与えている簡単な予備の説明——「けれども、諸価値の实体をなす労働は、同等な人間の労働であり、同じ人間労働力の支出である」（インスティトゥト版、第一巻、四三ページ）——と同じ内容のことを、ただ拙劣に歪めていいあらわしただけのものである。なぜ、「拙

劣に歪めている」というかといえ、マルクスの右の文章では、問題はあくまで価値の実体をなす労働の規定を中心としてゐるのにならして、これを引き写した遊部氏の論説では、「条件」がちがえば労働時間がちがう、というような、無意味なおしゃべりに変えられてしまつてゐるからである。

とりわけ、右の遊部氏の説明の中で注目し値するのは、「主観的条件」とか「客観的条件」といったような、特異な用語が使用されてゐることである。マルクスの先きの命題の中にも「条件」という文字は見出されるが、しかしこれは、どんなものでも「条件」となるものならよいというようなものではなく、紛れもなく「社会的・標準的な生産諸条件」と規定されてゐるとおり、「生産諸条件」のみを指し、しかも「標準的」なそれしか示してゐないものである。この「社会的・標準的な生産諸条件」は、「労働の熟練および強度の社会的な平均度」と並べて用いられてゐるとはいへ、後者は、「条件」であるどころか、価値形成的労働の質を規定する当の要因そのものである。マルクスの命題において第一義的意義を有するものは、まさしく労働の質を規定する後者であつて、前者はこれにたいしてたんに「条件」としての意義しかもつてゐないのである。ところが、「ヘーゲル式理解」に則した氏の論説では、「労働の熟練および強度」まで「条件」に、しかも「主観的条件」などというものに変えられ、「生産諸条件」は「生産諸条件」で「労働条件」と曲解されて「客観的条件」につくり上げられ、かくして両者は「主観的」「客観的」の両側面から労働時間の多少を規定する「条件」に仕立てられてゐるのである。ところが、また滑稽なことに、このようにして「主観的」「客観的」とりつぱな「規定」をいただいた両「条件」でありながら、両者の本質的な役割を示されることなく、ただ、「条件」がちがえば「労働時間がちがう」というような愚にもつかぬおしゃべりで片づけられてしまつてゐるのである。「語るに落ちる」とは、このような「ヘーゲル式論法」のために用意された言葉であらうか？ いづれにせ

よ、このような「条件」についての徹頭徹尾混乱した誤解は、マルクスの右の命題の完全な曲解と結びついていると同時に、行論において示されるごとく、また、市場価値論にかんする曲解とかたく結びつき、相互に「条件」づけられているものである。

(註) この「条件」にかんする遊部氏の論法をば、さきに検討すみの向坂氏の、「労働の熟練および強度」を「生産諸条件」の中に「解消」させてしまう手口と比較されたい。程度の差こそあれ、両論説ともに「条件」にかんする論法においてこのような理論的および論理的過誤を強行せざるをえないということの客観的な根拠は、第一巻第一章の価値論と第三巻第十章市場価値論との間の関連についての根本的な誤解、両者の皮相な同一視——したがってまた、第一巻第一章におけるマルクスの右の命題の完全な曲解——の中にあることは、行論において示されるとおりである。ただここでとくにわれわれの興味をひくのは、両氏の論説の外面的相反と内容的酷似という「弁証法」的關係である。

二 つぎに挙げられるのは、同じく特異な、「社会的必要労働」という用語である。

氏の論説の中では、「しからばいかにして社会的必要労働という範疇は可能であるか？」という、まことにこげおどかしの「問題提起」がおこなわれているのであるが、いったい、この「社会的必要労働」という新発明の言葉は、どこから借りてこられたものであろうか？ マルクスがくりかえし述べているのは、「社会的必要労働時間」であるが、この「社会的必要労働」という言葉は、おそらく、右のマルクスの用語から——「ヘーゲル式理解」のおかけで——「時間」という文字を削除してつくり上げられたものであろう。が、いづれにせよ、「社会的必要労働時間」から「時間」という文字を削ってできた「社会的必要労働」という言葉は、まったくのノンセンスである。労働が社会にとって必要であることぐらい、「どんな子供でも知っている」。「社会的必要労働」とは、要するに、「社会の存続にとって必要な労働」、「社会的労働」、あるいは簡単にいえば「労働」ということにすぎない。ところが、「社会的必要労働時間」

という言葉において問題となっているのは、「労働」ではなくして、「労働時間」なのである。「社会的に必要な」のは、「労働時間」の方であって、「労働」などではない。このように、「社会的必要労働時間」とはなんの関係もない、全く無意味な、「社会的必要労働」というただの言葉が、「範疇」にまで昇格させられた上に、この「範疇」は「可能であるか」という、およそスコラ的な「問題提起」がなされているのである。経済理論において、「範疇が可能であるかどうか？」などということの問題とすること自体、そもそも、「不合理」であり、馬鹿げているのである。このようなことを「問題」とすることのできる「理論家」は、およそ、科学的理論と無縁のものであることを、自ら公表しているようなものである。

ところが、遊部氏は、右のごとき不合理な、自己暴露的「問題提起」をなして、ただちにこれに「肯定的解答」を与え、ついでその「理由」として、「蓋し、社会の総労働力は、一個同一の人間の労働力として意味をもち、個々の個人的労働力は一つの社会的な平均的労働力たる性格を帯び、且つかかる社会的な平均労働力として作用するからである」(傍点—山本)という説明が下されているのである。この「理由」説明の中の、「社会の総労働力は、一個同一の人間労働力として意義をもつ」、「これらの個人的な諸労働力は、いづれも社会的な平均労働力たる性格を帯び、かかる社会的な平均労働力として作用する」という文章は、周知のように、ことごとくマルクスの文章の完全な引き写しであるが、しかし、これらの文章は、遊部氏の論説の中にそのままとり入れられながら、しかもその与えられた意味は、マルクスのそれとまったく異なったものとなっているのである。それは、ひとえに、遊部氏がこれらの文章を引き写すにさいして、前後につけた「蓋し」と「からである」という、二つの言葉によるのである。

マルクスは、「社会の総労働力は、無数の相異なる個人的労働力から成り立っているが、しかし、そのいづれも、

それが社会的な平均労働力たる性格を帯び、このような社会的な平均労働力として作用するかぎり、他と同じ人間労働力である」とし、「これら相異なる個人的労働力」はこのような「一個同一の人間労働力」として「価値に表示される」と述べているのである。ところが、わが遊部氏は、マルクスからその文章の大半を借りながら、「社会の総労働力は、無数の相異なる個人的労働力から成り立っているが、——価値にかんするかぎりには——それが社会的な平均労働力たる性格を帯びかつこのような社会的な平均労働力として作用するのであるから、社会的必要労働という範疇は可能である」というように、まったく別のことを主張するのである。見られるとおり、ここでは、マルクスの文章の意味が理解されていないばかりでなく、その本来の内容はすっかり歪められてしまっているのである。マルクスは、価値を形成する労働のいわば社会的な質を究明しようとして、社会的平均的労働力なる概念を説明しているのにひきかえ、わが遊部氏は、ありもしない「社会的必要労働」という「範疇」が「可能であるかどうか？」などというような、銜学的な、内容空疎な「問題」の説明のために、マルクスの社会的平均労働力にかんする説明を完全に歪曲してしまっているのである。

右の社会的平均労働力なる概念を、マルクスが何故にとり上げたか、また、それをどのように説明しているかという点については、——とくにその深い内面的意味については、——本節の「三、第一巻第一章における価値規定の問題」の中で究明することにしよう。

三 では、当面の中心問題——第一巻価値論と第三巻市場価値論との間の関連の問題——にたいして、遊部氏の論説は、どのような解釈を示しているであろうか？

遊部氏の論説においては、マルクスの価値規定にかんする説明が曲解されて、「主観的条件や客観的条件がちがえ

ば、同一種類の商品を生産するに要する労働時間はちがう」というように、たんなる個別的所要労働時間の差異の説明に歪曲されてしまったことは、さきにみたとおりであるが、このような「主観的条件」、「客観的条件」および「所要労働時間」にかんする杜撰な理解をもつてしては、「社会的必要労働時間」という、たったひとつの概念すら、その正しい意義を明らかにしえないであろうことは、当然に予想されることである。

そこで氏の論説により、さきに挙げた価値規定にかんするマルクスの命題がまずつぎのように「説明」し直され、ついで、それが第三巻市場価値論に直結せしめられるという経緯を観察することにしよう。

「一定生産部門の社会的必要労働時間とは、前述の如く該生産部門全体について生産諸条件と労働の熟練及び強度の程度とを平均化したものをいうのであるが、それは結局当該生産部門の生産物中最大多数を供給する企業の個別的・生産諸条件と労働の熟練及強度とによって代表される。したがって、社会的必要労働時間は該生産部門の生産物中最大多数を供給する企業の個別的労働時間に一致する傾向がある。」(傍点—山本)。

まず、問題となるのは、「該生産部門全体について生産諸条件と労働の熟練及び強度の程度とを平均化したもの」という言葉である。これらを「平均化したもの」とは、いつたい、どういうことを意味しうるであろうか？

「主観的条件」と「客観的条件」がちがえば所要労働時間がちがうのであるから、両「条件」の差異は「捨象」し同等の「諸条件」とすべきである、とは、さきに氏の論説がわれわれに教えていたところである。だが、「諸条件」の差異を「捨象」して同等なものにすることは、「平均化する」ことと、はたして同じであろうか？ 両者がちがうことは、まったく明らかである。その上、「諸条件」の差異は現実に存在しているのであって、簡単に「捨象」されたり、「平均化」されたりできるものではない。それであるからこそ、マルクスは、現存する各種の「諸条件」の中か

ら「社会的・標準的な生産諸条件と労働の熟練及び強度の社会的平均度」とを取り出して、明確にこれを価値形成的労働の質的規定の中心にすえたのである。この場合の「労働の熟練及び強度」は、ある特定の生産部門全体——遊部氏のいう「該生産部門全体」——についてではなくして、社会的な生産的労働全体について、いわば全生産部門についてみたものでなければならぬ。そして、その「社会的な平均度」をもって或る特定の生産部門の商品を生産するに必要な労働時間が、社会的必要労働時間なのである。マルクスの価値規定にかんする命題は、このように教えている。ところで、遊部氏のように、ある特定の生産部門全体について現存する生産諸条件と労働の熟練及び強度の程度とを「平均化」してみたところで、それが何を意味することができようか？ まして、「諸条件」を「平均化したもの」が「社会的必要労働時間」である、などという主張にいたっては、その論者の国語的知識の有無について深甚の危惧をいだかせるにはおかないものである。「諸条件」を「平均化したもの」が、どうして「労働時間」なのであるか!? このような深刻な曲解と混乱がなせ生じたかということは、当然、われわれによって明らかにされなければならないが、さしあたりその根拠として推論しえられることは、論者が第一巻の価値規定にかんする命題をば第三章第十章における市場価値規定にかんする命題とまったく同一視し、前者の正しい把握にもとづいて後者を理解しようとせず、むしろ反対に後者の事例をかりて前者を解釈し、後者をもって前者の具体的な説明であると誤信していることである。このことは、右の文章につづく氏の説明によっても、充分うかがい知られるところである。

(註) 本稿において、しばしば括弧付きで示される「諸条件」という言葉は、遊部氏のいわゆる「主観的条件(動情、熟練不熟練)や客観的条件(労働条件)」ということをも、簡單化して示したものである。この両「条件」なるものは、のちに詳細に論究されるように、価値規定においてはまったく異なった意義をもつものであり、これを断わりなしに併合して「諸条件」として示すことは、厳密に言えば誤まりであるが、しかし、とくにこのさいは、「諸条件」という一語をもって包括的に示す方が

簡單化のためにも、かつは、わが遊部氏および向坂氏の論旨を生かす上にもより適切と考えられるので、必要なかぎりにおいて、この括弧付きの「諸条件」を採用することにしたのである。

氏の論説によって「社会的必要労働時間」が「諸条件」を「平均化したもの」と規定されたことは右の通りであるが、さらに、この「平均化したもの」は「生産物の最大多数を供給する企業の個別的・生産的諸条件と労働の熟練の強度とによって代表されうる」という、特異な説明が与えられるのである。この説明によって、氏は、第一巻第一章価値規定にかんする命題を第三巻第十章市場価値を規定にかんする例解に首尾よく直結せしめたものと考えているようである。ところで、「諸条件」を「平均化したもの」と、「最大多数を供給する企業の個別的諸条件」とは、はたして、同じものであろうか？ これもまた、国語的知識の問題である。遊部氏も、おそらく、両者を同一視することは常識的にみても首肯されたいと感じたものであろうか、そこに「代表されうる」というような、割引の言葉を附けたものである。だが、この「代表されうる」ということは、いかなながら、「代表されないこともある」ことを示すものである。氏が反駁予防のためにか附けた「うる」という言葉は、かくして反って、氏の理解の混乱をいっそうきわ立って示す役目しかしないのである。もとより、「諸条件を平均化したもの」と、「最大多数を供給する企業の個別的諸条件」とは、まったく異なったものである。むしろ、「最大多数を供給する企業の個別的諸条件」は、「諸条件を平均化したもの」でないことの方が、最大多数の場合である。遊部氏は、右のように「代表されうる」と割引して、主張しながら、これによってただちに、「したがって」として、「社会的必要労働時間は最大多数を供給する企業の個別的労働時間に一致する傾向がある」との結論を下すのである。一致する傾向がある、と主張して、「一致する」と断定していないのは、やはり「代表されうる」と同じく反論予防的割引措置に出たことかと推察されるが、これでは「一致しない

傾向もある」ことになって、氏の呼号する理論的意義が滅殺されること甚しいものがあるようである。

遊部氏の右のごとき論法は、これを簡単に示せば、つぎのとおりである。

- (1) 「社会的必要労働時間」とは、ある特定部門の「諸条件」を「平均化」したものである。
- (2) ある特定部門の「諸条件」を「平均化したもの」は、その部門で最大多数を供給する企業の個別的「諸条件」によって代表される。

(3) 故に、「社会的必要労働時間」は最大多数を供給する企業の個別的労働時間に一致する。

見られるとおり、まことに美事な三段論法であるかのようにであるが、その実、内容的には、これより支離滅裂な論法は考えられないほどのものである。なによりも重大な誤謬は、マルクスが、とくに力をこめて、労働の熟練および強度の社会的な平均度を強調し、これによってはじめて諸労働が価値に関連しうるものとなしたのにたいして、遊部氏が、ある特定の生産部門における「諸条件」を「平均化したもの」などを引っぱり出してきた上に、この「平均化したもの」を、さらに逆行して個別的な「諸条件」によっておきかえてしまった点である。さらに、マルクスの命題を離れて、氏自身の論説についてみてさえ、その自家撞着ぶりに眼に余るものがある。すなわち、ついさきに「諸条件」の差異は所要労働時間の差異をもたらすが故にこれを「捨象」すべきであると主張されたばかりであるのに、曖昧な「平均化したもの」という言葉が中間に置かれるや、ふたたび個別的な「諸条件」に逆戻りし、しかも、この個別的な所要労働時間こそ社会的必要労働時間であるとの断定が下されるのである。これでは、そもそも、何のための「捨象」であったのであるか！

以上見てきたごとき自家撞着と混乱は、例解としてかかげられた「社会的必要労働時間」の説明において、その真

価を發揮せざるをえないのであって、その次第はつきに見られるとおりである。

まず、ある特定の生産部門についてA、B、Cの三企業が分けられ、Aの「諸条件」は優等、Bの諸条件は中等、Cの「諸条件」は劣等とする。「諸条件」がちがえば所要労働時間がちがうことは前に述べられたところで、たとえば、Aの個別的所要労働時間は二時間、Bは五時間、Cは八時間というようにちがうのは当然である。生産物総量は五〇個、そのうち、Aは一〇個、Bは三〇個、Cは一〇個を生産するとすれば、Aの個別的所要労働時間合計は二〇時間、Bのそれは一五〇時間、Cのそれは八〇時間となる。これらの個別的所要労働時間合計を総計すれば、二五〇時間という数字が得られる。これは、A、B、Cの各々がその生産物にそれぞれ二〇時間、一五〇時間および八〇時間をかけたのだから、 $20 \times 150 + 80 \times 250$ により、その総計としては二五〇時間になる、というだけのことである。ところが、わが遊部氏は、簡単な数字だけの計算から、右の所要時間総計を生産物総計五〇個で除すことによつて得られる五時間が、「平均的に」要する労働時間であり、したがつてこの五時間が「社会的必要労働時間」である、との結論をひき出すのである。このような考え方は、はたして正しいものであろうか？ それは、たんに誤っているといふばかりでなく、重大な曲解および混乱を少なからずふくんでさえているものである。これをつぎに列挙して、簡単に説明を加えてみよう。

(1) まず、「諸条件」の差異は所要労働時間の差異をもたらすが故に当然「捨象」されるべきであるといったさきの主張は、ここではまったく覆えられてしまい、それがたんなる諷刺文句にすぎなかったことが暴露されている。「諸条件」の差異は「捨象」されるどころか、ここではかえつて、二、五、八時間というように所要労働時間の差異をもたらす根拠としてきわめて重要な意義を与えられているのである。さらに、

(2) ついさきには、「諸条件」を「平均化したもの」すなわち「社会的必要労働時間」であると主張されていたのであるが、ここでは、「諸条件」ではなくして「個別的な所要時間」をば「平均化したもの」こそ「社会的必要労働時間」であると断定されているのである。ところが、

(3) ここに代つて登場した「個別的所要時間」を「平均化したもの」は、どうかといえ、これは何ものを意味しえない、たんなる数字にすぎない。それは、富農と貧農との数字を合計して「平均」した数字が何ものををも説明しえないのとまったく同様である。

(4) この「五時間」なるものは、この生産部門での個別的な所要時間のたんなる総平均数字にすぎないのであって、「社会的必要労働時間」などではけつしてない。

(5) いまもしCが、何らかの理由により、その「諸条件」が悪化し——たとえば、「主観的条件」において労働力自体、より「怠惰」となり、より「不熟練」になるか、あるいは、意識的にサボることによつて——そのために一個当り所要時間が三三時間になったとすれば、いったい、どういふことになるであろうか？ 遊部氏の論説にしたがえば、Cの所要時間合計は三三〇時間となり、A、B、Cの所要時間総計は五〇〇時間となり、したがつて、一個当り平均所要時間は一〇時間ということになる。この一〇時間は平均所要時間であり、したがつて、りっぱな「社会的必要労働時間」である。この部門では、ただCの「諸条件」が変りその所要時間が八時間から三三時間に延びさえすれば、それで「社会的必要労働時間」は、なんと、五時間から一〇時間に倍加するのである！ 遊部氏は、このような「平均的所要時間」としての「社会的必要労働時間」によつて規定された価値を「社会的価値」と呼ぶと主張しているのであるから、結局、社会的価値なるものは、たとえば、Cにおける労働力の「怠惰、不熟練」が増せば、簡単に

増大することになるのである。これは、まことに驚嘆に値する「価値論」である。この驚くべき価値論の正体は、つぎのマルクスの文章を一読しただけで、歴然たるものがあるのである。

「もし一商品の価値が、その商品の生産中に支出される労働の分量によって規定されているとすれば、ある人が怠惰であるか不熟練であればあるほど、彼はその商品の仕上げにそれだけ多くの時間を要するというわけで、彼の商品はそれだけ価値が多いいかに見えましょう」(インスティトゥと版、第一巻、四三ページ)。

マルクスは、それゆえにこそ、個別的な「諸条件」をもつ個別的な労働力ではなくして、まさに社会的・平均的な労働力を規定したのである。ところが、わが遊部氏は、右のマルクスの注意に真向から反対して、「彼の商品の価値はそれだけ多い」との主張をかかげているのである。

(6) したがって、遊部氏が、個別的な所要時間をもって「個別的価値」を規定するものであるとし、右のごとき「平均所要時間」をもって「社会的価値」を規定するものであると主張するとき、氏の論説における混乱と誤謬がもはや決定的に收拾しがたいものとなることは、理の当然というべきであろう。ここには、「所要労働時間」を「価値」と同一視する向坂氏の論説にあらわれた致命的誤謬が、より完成された形態で示されているのである。

四 さて、以上のようにして、三種の企業の実例を設けて、「平均的所要時間」こそほかならぬ「社会的必要労働時間」であり、これこそまさしく「社会的価値」を規定するものであると説明しおえた遊部氏は、ここで突如として反転して、右のような「社会的価値」の規定は、「いまだに簡単な商品の価値規定に属するもの」であるとの主張をかかげるのである。

いったい、右のような主張は、どうして「可能」となるであろうか？ さきに挙げられた三種の企業の実例は、そ

そもそも、「資本制生産関係があらわれる」以前の、「簡単な価値規定に属する」関係を示しているのでしょうか？ それともそれは、「資本制生産関係」をあらわしているであろうか？ これまた、その解答は、問題提起と同時に与えられているといふべきであろう。一定の独立した「生産部門」、一定の「生産諸条件と労働の熟練および強度」をもつ各種の企業、そしてさらに、該生産部門の生産物の最大多数を供給するような企業——これらのものは、資本制生産関係があらわれる以前において、単純な商品生産のもとで、はたして、一般的に——「例示」として採用される程度と範囲において——存在しえたであろうか？

わが遊部氏は、『資本論』第三卷第十章市場価値論における「組合せ」の説明をそのまま引き抜いてきて、マルクスの価値規定にかんする説明を完全に壊滅させてしまうような「社会的必要労働時間」論を構成していながら、しかもなお、このような「社会的必要労働時間」論は、まだ資本制生産関係があらわれる以前のことであり、簡単な価値規定に属するものでしかない、と主張することを止めないのである。だが、このような主張というものは、マルクスが第三卷第十章市場価値論において、資本制生産関係を前提するばかりでなく、まさに諸資本の競争そのものがいかに平均価値をつくり出すかを当面の問題としてとり上げたという事実をば、簡単に忘れ果てることのできる論者にとつてのみ、許されることである。

したがって、氏が、「資本制生産関係があらわれると」はじめて「社会的価値は市場価値に転化する」と述べても、これがまったく自家撞着をあらわすものにすぎないこと、「この両者は内容を同じくする。ただ後者は前者のより具體的に展開された形態である」^(註)と聞かされても、それはたんなる諷刺文句でしかないということを、われわれは疑えないのである。

(註) この言葉について、遊部氏は、「第七章第一節みよ」という注意を与えている。そこで、こゝろみに氏の著書の「第七章第一節」の最初の部分を開くと、まず、「市場価値は社会的価値と殆ど同一の意味をもっている」(前出、二三七ページ、傍点—山本)という説明が述べられている。ところが、それから七行先きのところでは、「社会的価値と市場価値とが同一の内容を意味していることは」、「たとえば、マルクスがある個処で「市場価値即ち社会的価値」と言っていることからして「明らかである」と述べられているのである(傍点—山本)。そもそも、「殆ど同一の意味」という言葉と「同一の意味」という言葉とは、まったく同一なのか、あるいは「殆んど同一なのか!?」なぜ同一であるのかという、「同一の意味」の根拠を明らかにしようとしてもしないで、ただマルクスの「市場価値即ち社会的価値」という言葉をもつてきて、これを簡単に「根拠」づけようとするこの「ヘーゲル式」論法の、なんと安直手軽であることか!

ところで、「同一の意味」をマルクスの一語で簡単に片づけた氏は、今度は、「殆んど同一の意味」についても、まったく同様にマルクスよりの引用を挙げただけで、その権威により簡単にこれを「根拠」づけること、つぎのごとくである。すなわち、氏は、『資本論』第一巻第十章「相対的剰余価値の概念」の中の、「新たな生産様式が一般化し、したがってまた、より安く生産された商品の個別的価値と社会的価値との差別が消滅するや否や、かの特別剰余価値は消滅する」(インスティトゥット版、三三四ページ)という簡処をなんの説明もなしに引用しただけで、ただちに、つぎのような主張をかかげているのである。——曰く、即ち社会的価値とは或る商品の社会的必要労働時間によつて測定された価値であつて、その個別的価値と対立している。しかし社会的価値はいまだに抽象的な規定である。しかるに市場価値は同じ内容のより具体的な展開された規定である」と。マルクスにあつては、相対的剰余価値の生産を説明するために特別剰余価値を明かにする必要がある、そのためにこそ、第三巻に先きだつて、第一巻第十章で、社会的価値と個別的価値とを説明していることはいまでもないところである。社会的価値は、品のそれであり、社会的価値もまた資本制商品について述べられていることはいまでもないところである。社会的価値は、特別剰余価値を説明するために必要不可欠の概念であつたのである。このような社会的価値は、第三巻第十章の市場価値とその内容においてまったく同一のものである。ただ第一巻においては、特別剰余価値を説明することが当面の課題であつたから、平均価値についての説明をもち出す必要はなく、たんに個別的価値と社会的価値と市場価値との差異を問題とするだけで事足りたのであり、したがつて第三巻第十章におけるように資本の競争や市場価値と市場価格との問題を引き入れることは却て混乱をひきおこすことになるが故に、ことさら市場価値という言葉を避けて社会的価値といつていたのである。ところが、

わが「ヘーゲル式」論説にあつては、社会的価値という規定は「資本制生産関係があらわれる以前のものであつて、いまだに抽象的な規定である。それはいまだ簡単な価値規定に属するものだ。市場価値は社会的価値のより具体的に展開されたものだ」ということだけが、くりかえされるばかりである。それゆゑ、この種の論法にかかれれば、特別剰余価値の生産は資本制生産関係があらわれる以前のものでしかないのである！ 二つのものが同一の内容をもっているということは、一方が単純商品生産をあらわし、他方が資本制商品生産をあらわすということなのである！

五 はじめ、遊部氏は、「個人的諸労働力は一つの社会的な平均労働力たる性格を帯び、かかる社会的な平均労働力として作用するから、」して「社会的必要労働」という「範疇」は可能である、と述べ、ついで、「社会的必要労働時間」なるものの説明を―例示をもつて―与え、「社会的価値」なるものは「社会的必要労働時間によって規定された価値」であると主張し、さらにすすんでは、「社会的価値の規定はいまだに簡単な商品の価値規定に属するもの」であり、「資本制生産関係があらわれる」以前のものであるとの断定を明らかにしていたものである。ところが、今や最後の土壇場において、遊部氏は美事な「どんでん返し」を見せ、「社会的必要労働―社会的価値」なるものは、「現実の資本制社会において各生産部門ごとに生産諸条件の標準化と労働の熟練及び強度の平均化とが行われる」「段階」にいたつて「『はじめて實際的に眞実に』あらわれる」のだ、という主張を高々とかかげるのである。ここでは、「社会的必要労働」のほかに「抽象的労働」も一枚加わり、「抽象的労働」は資本制生産が相当に発達した段階にいたつてはじめてあらわれ、かかる意味で「社会的必要労働」と「相関関係」にあるとされ、かくして、つぎのように論旨明確に敷衍されるのである。

『「抽象的労働」も『社会的必要労働』も大工業の相当の発達段階を前提とする。』

「しかるに、(1)前資本主義経済から資本主義への過渡期においては、様々な生産諸条件と労働の熟練及強度の様々な程度とが

存することがむしろ常態であつて、この場合には範疇として社会的必要労働——社会的価値の成立は困難(?!?)である(?!?) (傍点および(?!?)——山本)。

「したがつて(?!?)、『社会的必要労働』という範疇の定立(?!?)には完全に発達した商品生産即ち資本制生産が前提されるのである(?!?) (傍点および(?!?)——山本)。

ここでの遊部氏の論理は、いたつて簡單明瞭である。すなわち、「各生産部門毎に生産諸条件の標準化と労働の熟練及び強度の平均化が行われ」、それらの「生産諸条件と労働の熟練及び強度の程度」が全部同等のものとなつたとき、「はじめて實際的に眞実に」「抽象的労働」も「社会的必要労働」も成立することになるのだが、まだ「標準化」も「平均化」も行われず、「生産諸条件と労働の熟練及び強度の程度」が全部同等でなく、「様々」である場合には、「抽象的労働」も「社会的必要労働」も、「實際的に眞実に」^(註)成立することはできない、というのである。このような論理は、形式的にはりつぱなものであるが、「實際的に眞実に」この上もない無意味なおしゃべりの標本でしかない。「抽象的労働」や「社会的必要労働」が「成立」しないと、いったい、どういふことであろうか？ それは、価値が「成立」しないということである。労働生産物が商品として交換されることがないということである。簡単な二商品の交換そのものですら、すでにりつぱに「抽象的労働」及び「社会的必要労働」の「成立」を示しているのである。遊部氏の超ヘーゲル式論説においては、「はじめて實際的に眞実に」という文句を契機として、「大工業が相当程度まで発展する以前」の、すなわち、「資本主義経済」が確立される以前の、商品も、商品交換も、貨幣も、資本も、および「価値」をもつほどのものは、ことごとく「止揚」され、きれいさっぱり「消去」されつくしてしまうのである！

(註) マルクスの『経済学批判』の「序説」の中からこつそり拝借におよんだこの響きのよい言葉の、なんと深遠にみえてノン

センスな飾りではないことか！

また、右の遊部氏の論説を「資本主義経済」の方からみれば、こういうことになる。すなわち、「各生産部門ごとに生産諸条件の標準化と労働の熟練及び強度の平均化」が行われなにかぎり、「標準化」および「平均化」ができ上がっていないかぎり、「資本主義経済」もなければ、「資本制生産」も「成立」が困難だ、ということになる。「標準化」と「平均化」ができ上がっていない社会は、商品生産社会でもなければ、資本制社会でもないのである！現実の社会においては、たんに「標準化」および「平均化」の傾向があるだけで実在するのはすべて「標準化」されていない条件、平均化されていない労働なのであるから、「實際的に真実に」在るのは、似而非資本主義社会であり、地球上いづれの先進国も「實際的に真実に」資本主義経済に到達することは永遠にありえないのである！

見られるとおり、マルクスが価値規定にかんする周知の命題の中で「現存の社会的・標準的な生産諸条件と労働の熟練及び強度の社会的な平均度」という言葉を中心に据えているのは何故か？という、もっとも重要な根本問題は、わが遊部氏の超ヘーゲル式論法によって、完全に「止場」されてしまっているのである。右の根本問題についての説明は、本稿の「三」においておこなわれるが、当面、「標準化」と「平均化」にかんして注意まで申しそえておくならば、むしろ、現存する「諸条件」が多様多様であるからこそ、いいかえれば、現実には「標準化」および「平均化」がおこなわれていないからこそ、「平均」が問題とされなければならず、したがって明確に「平均度」という規定が与えられる必要であったのだ、といわなければならない。遊部氏の右のごとき論法は、「平均」という言葉と「平均化」という言葉との内容的差異について論者がはたして「標準的」「平均的」な国語的知識を有しているかどうか、読者をして深刻な疑惑の念を抱かさずにはおかないのである。

(註) このような「平均」と「平均化」との意識的または無意識的混同が、同じく向坂氏の論説における本質的要素の一つをなしているものであることについては、すでに指摘されたところである。ただ、この点にかんする向坂氏の論説と遊部氏のそれとのちがいは、たんに、後者が前者の混同や混乱をばより明確な形で、より単純・卒直に表明している点にある。だが、いづれにせよ、前者の「論理と歴史」の「観点」が「平均」と「平均化」とを混同し、後者の「ヘーゲル弁証法的論証」の「見地」が同じく「平均」と「平均化」とを混同している点は、まことに興味あることといわなければならない。

六 ところが、右のごとき「標準化、平均化」論をひっさげて、わが遊部氏は、いわゆる労働価値説の社会的歴史の根柢を一挙に、解き明かしてくれるのである。いわゆる労働価値説は、十八世紀中葉から十九世紀初頭にかけては完成された形態であらわれることができたのであるが、それは何故か？ とたづねて、氏は、つぎのようにこたえる、——範疇としての「社会的必要労働——社会的価値」の成立は、それ以前には困難であったからであり、資本主義経済の成立の時期になってはじめて成立することができたからである、と。

このような「経済学史」的主張は、実に無限の教訓をわれわれに与えるものであるが、さしあたり、われわれは、以下、簡単にその要点を摘記するにとどめよう。氏の右の「経済学史」的主張がもっている唯一の客観的内容は、要するに、問題となっている歴史の時期において、商品生産がいちじるしく発達し、労働力の商品化および労働力商品の流動が相当広汎に行われるようになったという、歴史的事実を示していることだけである。この簡単な歴史的事実を、氏は、誤った「社会的必要労働——社会的価値」範疇成立論、誤った「労働価値説」論、および誤ったスミス評価をもって、「経済学史」的に、——きわめて術学的に——表現したままでのことである。

(1) 十八世紀中葉から十九世紀初頭にかけて、「諸条件」の「標準化」と「平均化」がおこなわれていたであろう

か？ 当時すでに大工業が「相当の発展段階」にすすんでいたものであろうか？ ^(註) もし、そうでないとするならば、「社会的必要労働——社会的価値」の「範疇」の「成立」が困難であつた時期に、労働価値説がほぼ完成されてしまふとは、いったい、どういふことであらうか？

(註) マルクスの「市場価値即ち社会的価値」といふ言葉の中の文字の配置から「学問的」価値論をつくり上げるほどの遊部氏が、この肝腎の「経済学史」的論説をうち立てるにあつたつて、『資本論』第一巻第四篇の第十二章、「分業とマニユファクチュア」のつぎに第十三章「機械と大工業」が置かれていふといふ、構成の順序第二章の配置を見落したといふことは、千慮の一失ともいふべきものであらうか？

(2) 「いわゆる」といふ接頭語がついたいわば括弧付きの「労働価値説」ならば、すでに十七世紀半ばにおいて、われわれは、その一応の「定式化」を見ることが出来る。商品価値を人間の「労働」に結びつけるかぎり、価値を「労働」によつて説明しようとするかぎり、たとえ、その「労働」が「特定の形態の労働」であらうと、はたまた「労働一般」であらうと、そのかぎりでは、「労働価値説」に組み入れられるべきものであり、また、当然「いわゆる」といふ条件付きの「労働価値説」でしかないのである。

(3) 価値を「労働一般」によつて説明するスマイズ、リカアドウの価値論が、「いわゆる労働価値説」の最良のものであることは疑いないが、それがいかに「完成された形態」をとらうと、根本から誤っており、狭いブルジョア的視野に囚われたものであり、非科学的な——いわゆるヒューマニズム論者どもを喜ばせるだけの——「労働価値説」にすぎないことも、疑いないところである。科学的な労働価値説、真に「完成された形態」といふ言葉が「はじめて實際的に真実に」正当に適用されうる労働価値説は、マルクスの価値論のみであることも、疑いないところである。

(4) マルクスの科学的な労働価値説と、スミス、リカアドウの非科学的な「労働価値説」との本質的差異点はどこにあるか? といえ、それは、後者が「価値」(この括弧つきに注意されたい)を「労働一般」に結びつけ、「価値」にあらわれる労働と使用価値をあらわれる労働とをまったく区別しえず、俗物的「文明社会」論におちいったのに反して、前者がたんに両者を区別したばかりでなく、はじめて労働の二重性を明らかにし、価値を抽象的人間的労働に結びつけ、かくして資本制商品生産の歴史的性質を明白にしたところにある。^(註)

(註) スミス、リカアドウの理論が「最良のブルジョアの経済理論」であるといわれるのは、けつして故なきことではない。この場合、「最良の」という言葉と「経済理論」という言葉だけひき出して、「最良の経済理論」と読んではいならない。むしろ「最良」だが、やはり根本的に誤った似而非科学であることを銘記すべきである。スミス、リカアドウにあつては、経済学がそもそもからちがつているのである。それは科学的な経済学ではありえなかつたのである。マルクスはその『資本論』において、第一巻冒頭から第三巻末尾にいたるまで一貫してスミス、リカアドウのブルジョア的な、括弧付きの「経済学」を徹底的に批判し、その全面的批判の上に、唯一の科学的な経済学を、「はじめて實際的に眞実に」確立したのである。それゆゑ、『資本論』の中に展開されているマルクスの経済理論の正しい把握にとつての試金石でもあり、また、その把握の決定的条件の一つを成しているのが、スミス、リカアドウの経済理論の根本的誤謬、その本質的欠陥を明確にすることではなければならないのは、理の当然といふべきである。

ところが、今日、わが国のいわゆる、経済理論家の中には、マルクス自身によつて明かにされている右の事実はさらに念頭になく、いわゆる労働価値説と科学的な労働価値説とを混同(平均化!)し、これに小ブルジョア的なヒューマニズム論を加味して、スミス価値論の「復位」を宣伝したり、スミスによる「経済学の生誕」などといふことをかづきまわつて「専門家」が少なくないのである。このような、小ブルジョアのヒューマニスト的解釈によれば、スミスの価値論は似而非価値論ではなく、りつばな科学的な価値論であり、スミスの経済学は、ブルジョアの似而非経済学ではなくして、りつばな科学的な経済学なのであり、今日われわれは、——「われわれ小ブルジョアのヒューマニストたちは」と読むべし、——スミスを徹底的に批判した当のマルクスから出発すべきではなく、「価値論」や「経済学」を「確立」したスミスからこそ出発すべきなのである。スミス、リ

カアドウを徹底的に批判し、その根本的誤謬の暴露の上にはじめて科学としての経済学が立ち立てられることを、その全面的批判の上に築き上げた科学的理論の金文字を以て示したほかならぬ当の『資本論』が公けにされてからすでに八十年有余をへて、科学的経済学が『資本論』よりすすんで『帝国主義論』から社会主義経済学にまですでに発展している今日の段階において、『資本論』にはじまる科学的経済理論をまさにいかに適用し、発展させるべきかが問題となつてはいるほかならぬ現在において、マルクスによつて徹底的に批判されつくしたスマス流のいわゆる「経済理論」をかつぎ出し、スマスの非科学的価値論を科学的な価値論であるかのごとく、また、スマスの似而非経済学を科学的な経済学であるかのごとく、自分も思いこみ他人にも宣伝してまわつていゝ、いわゆる、経済理論家なるもの存在は、まことに滑稽でもあり、ミゼラブルでもあり、真に「日本の水準」の恰好の指標たるを失わない。しかもあきれたことには、このスマスのいわゆる労働価値説を直接受けつぐ、いわゆる、経済理論家たちは、右の超アナクロニズム的主張をもつて真正マルクス主義経済学の立場に立つものであり、これこそ今日の日本におけるマルクス主義経済学の発展にとつての正しい方向を示すものであると主張して止まないのである！

まことに人間は自分自身の物尺でしかものを計れないのである。科学的な理論を厳密かつ客観的に、理論的および論理的に一貫して把握することなどしようとしなない小ブルジョアの「ヒューマニズム」——これはもちろんいゝ、いわゆる、理論家の独りよがりの括弧付きの「ヒューマニズム」である点にとくと注意されたい——の見地からすれば、『資本論』の中に展開されている価値論はスマスの「価値論」と「殆んど同一」に見え、マルクスの労働価値説はスマスの「労働価値説」と「殆んど同一」に見え、かくして、マルクスの経済学もスマスの「経済学」も、経済学としては「殆んど同一」であると結論されるのである。スマスの物尺でしかマルクスを計ることのできないこれらのいゝ、いわゆる、「マルクス主義経済理論家」たちが、今日、客観的にみて一箇の「潮流」をなして、スマス「価値論」の「復位」とか、スマス「経済学の生誕」とかを説きまわる一方、「経済学の立場」と「人間の問題」といつたようなこけおどかしのテーマで小ブルジョアの「ヒューマニズム」を宣伝し、かくしてマルクス経済学を擁護するという体裁のもとにマルクス経済学の本質をこの上もなく歪め傷けるという芸当を公けに演じていることはまことに驚嘆すべきことといわなければならぬ。日本のいゝ、いわゆる、マルクス主義経済理論家にたいして「低劣な理論水準」という客観的な正しい批判が下されことについては、これらのスマス的マルクス経済理論家も当然無縁のものではないはずであるが、これらの連中について批判も自己批判もあらわれず、万事スマス的「ヒューマニズム」をもつて事が片づけられ、相も変らぬスマス流のいゝ、いわゆる、経済理論が巾をきかしているとは、また、なんとありがたい日本「マルクス経済学」であることか。

とはいえ、今日、マルクス経済学をスミス流の似而非経済学に引き貶そうとするこれらの「潮流」の誤謬を徹底的に暴露し、これを正確に克服しつくすことなしには、科学的経済学の普及、発展、したがってまた真の民主主義の発展もありえないのであつて、これらマルクス経済学の体裁をもつた似而非経済学の批判、克服は科学的経済学を学ぶ者にひとしく与えられた刻下の重大な課題の一つでなければならぬ。わたくしは、近く別稿においてこの緊要な課題に応えたいと考えているものである。

(5) スミス、リカードのい、わゆる労働価値説が、い、わゆる労働価値説のうちでは、比較的よりすぐれたものであり、ブルジョアの枠内でこれ以上望めないほど「完成された形態」のものであったことは事実である。だが、「ブルジョアの枠内で」ということは、真に科学的な理論となりえないかぎりであり、当面の問題についていえば、抽象的人間の労働を認識しえなかつたかぎりであり、ということである。

(6) それゆえ、スミス、リカードのい、わゆる労働価値説なるものが十八世紀中葉から十九世紀初頭にかけて「比較的完成された形態」であられたことは事実であり、氏の確言されるとおりであるとしても、その歴史的社会的根拠として、「社会的必要労働」とか「抽象的労働」という「範疇」の「定立」をもって「理由」づけるとき、氏の論説における誤解と混乱は、もはや救いがたいまでになるのである。かくしては、問題は、もはや理論乃至は論理ではなくして、心理的「性向」の分野に移っているといわなければならない。

ところで、遊部氏は、右のごとき混乱した「経済学史」的主張をかかげたあと、さらにその「主張」をより強力ならしめるべく、——（ということとは、その混乱と誤謬をいよいよ抜き差しならぬものにするということであるが）——さらに補足として、今度はつきのごとき「経済史」的主張を、読者に「注意」として与えるのである、——曰く、

「なお社会的必要労働の例解に、マルクスによって周知のごとくイギリスの織物業における蒸気織機の採用がとりあげられていることに注目する必要がある」と。

氏によれば、マルクスが「社会的必要労働時間」について規定したあとで「たとえば」という言葉をつけてイギリスの蒸気織機の例を挙げたのは、「社会的必要労働」の例解なのだそうである。遊部氏の例によって例のごとき「ヘーゲルの」論法によれば、「社会的必要労働時間」から「時間」を「止揚」して「社会的必要労働」に転化させることは、もとより安直なことであるにちがいないが、いかんながら、「社会的必要労働時間」と「社会的必要労働」とでは、「価値」と「労働」ほどのちがいががあるのである。イギリスの蒸気織機の例示をもって、「社会的必要労働」という「範疇」の「定立」の説明のためなどと主張することは、この蒸気織機の例をマルクスが何のために挙げたか、その真の深い意味をまったく感知することすらできないことを自分でさらけ出しているものである。このイギリスの蒸気織機の例は、——行論において示されるように——はるかに重要かつ本質的な意義をもっているのである。それゆえ、遊部氏のこのような、「経済史」的主張はここでは、あだにも、氏のつぎはぎの才能を端的に表示するだけの意味しかもたないのである。

以上、『資本論』第一巻第一章第一節における価値規定にかんする周知の命題について遊部氏が与えた論説についての検討を通じて、われわれは、第一巻第一章価値論と第三巻第十章市場価値論との間の関連の問題にたいして、氏の論説がいかなる解釈をふくんでいるか、ということについて、大体の判断を下すことができるように考えられる。氏の論説なるものは、マルクスからの引用をのぞけば、むしろ、誤謬と混乱と自家撞着の堆積といった方が適切

なぐらいであつて、これらの堆積の奥に一貫した思想を汲みとることは容易なことではないが、しかし、それにもか
かわらず、氏の論説を通じて、第一巻第一章価値論と第三巻第十章市場価値論とは本質的にみてもまったく同じもので
あるとする考え方が一貫して——意識的にせよ無意識的にせよ——流れていることは、否定できないであらう。氏の
解釈によれば、両者の差異はたんに、「前者に比して後者がより具体的である」点にあるにすぎない。このような解
釈は、さきに検討した向坂氏の主張ときわめてよく似ているものである。少しく誇張しているならば、当面の問題に
かんするかぎり両者の解釈の間に、本質的な差異は見られないといえるのである。(但し、遊部氏の附け足した「経
済学史」のおよび「経済史」的主張は、別である)。

しかしながら、これまでの検討を通じてすでに明瞭にされたように、「第一巻第一章価値論と第三巻第十章市場価
値論との内容は本質的にみて同一であり、その差異はたんに前者の『抽象的』にたいして後者の『具体的』という点
にある」というような主張ないしは解釈は、必然的に、第一巻第一章の価値規定にかんするマルクスの命題の根本的
な誤解と歪曲、および、第三巻第十章市場価値論の内容とその意義にかんする同じく根本的な誤解と歪曲にかたく結
びついており、相互に条件づけあっているのである。このことはまた、すでに詳細にみたように、「価値」と「労働」
との混同、「労働」と「労働時間」との混同、「平均」と「平均化」との混同、「標準的」と「平均的」との混同、「条
件」という言葉を通じての「生産諸条件」と「労働の熟練及び強度」との混同、等々、——科学的な経済理論を正し
く把握するために緊要な基礎的諸概念についての単純幼稚な誤解、曲解および混乱がかたく結びついており、かくて
これら三者が混然一体となつて、非マルクスの価値論をつくり上げることになつてゐるのである。^(註)

(註) この点にかんして、われわれに特別の興味を惹くのは、向坂氏が、さきに挙げたその著『経済学方法論(第三分冊)』の

「第三章 歴史的・論理的 その二——価値と生産価格——」において、「小兒病的発作の中での」してばかりいる副島種典氏の所論を批判したあとで、遊部氏の著書『価値と価格』をとり上げて、遊部氏の所論を同じく痛烈に批判し、ついでに「九官鳥のマルクシスト」という名称を奉つているという事実である。これまでの検討を通じて明らかにされたように、当面の問題にかんするかぎり、遊部氏の論説は向坂氏のそれと本質的に差異はないのであるから、この場合、当の遊部氏が「九官鳥的」役割を演じているのは、エンゲルスにたいしてではなく、——エンゲルスならば、むしろ申し分ないのだが、——むしろ向坂氏自身にたいしてだといわなければならないであろう。しかも遊部氏は、たんに向坂氏と同じ論説をそのまま述べるだけでなく、そのような論説の本質的な構成要素たる誤解、混乱および自家撞着を典型的な形態に展開し、より純粋な形で表現しているという点で、向坂氏にたいしての「忠実無比な九官鳥」と称せられるべきなのである。

さて、以上によって、当面の問題にかんする向坂氏および遊部氏の見解について大体の要領をうかがうことができただので、われわれは、これまでの検討の成果を念頭におきつつ、つぎに、われわれ自身の見解を展開することにしよう。さきを示されたごとく、当面の問題の正しい解決にとっては、第一に、第一章価値規定にかんする命題の意味の理解、とくに、「社会的必要労働時間」、「生産諸条件」、「労働の熟練および強度」、「標準的」および「平均度」等々のごとき基礎的諸概念の内容の理解が、第二には、第三巻市場価値論の内容および意義にかんする理解が、先決問題となっているので、われわれとしては、まずこの二つの先決問題をひとつひとつ慎重に考究することからはじめ、ついでこれらの考究をもととして、第一巻第一章価値論と第三巻第十章市場価値論との間の関連の問題の解決をこころみ、かくして、『資本論』全巻における市場価値論の位置づけを論究することにしよう。